

新金岡更池遺跡

— 中央環状線新金岡交差点立体工事に伴う発掘調査報告書 —

1994年3月31日

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

表紙写真 解説

新金岡更池遺跡 遠望

中央に右上から左下へ中央環状線が通っている。中央付近道の中央分離帯で工事しているのが立体化工事である。この中で掘り下げているのが調査区域である。調査地右側に区画整理を行っている所が長曾根遺跡である。上の緑地は大泉緑地である。遠方に河内大塚山古墳、古市古墳群が見えている。

巻頭写真1



遺跡を上空から望む。古墳時代集落が右側に、左側に開析谷が見えている。

巻頭写真2



古墳時代集落の拡大写真である。中央の方形の穴は攪乱孔である。



掘立柱建物1の柱掘方である。柱痕に焼土が見えている。この建物は火災に逢った可能性がある。



開析谷内にある土坑7より出土した石鏃である。

序 文

この遺跡では、数多くの古墳時代後期の掘立柱建物が調査されている。この集落は非常に短い間営まれた集落だそうで、古墳時代後期の、激動の社会をこの集落の盛衰が示しているのかも知れない。そして出土した須恵器も大型の高杯、器台、長頸壺があり、この事から古墳時代後期の豪族層の集落であった可能性が指摘されていて、興味ある集落である。この遺跡は南に広がる長曾根遺跡の調査成果も加味する事によって、さらに深い理解ができるのではないかと思われる。今後両者を総合した深い分析を期待している。

当遺跡の調査箇所は、大阪府でも最も交通量の多い道路の中央部分であり、さまざまな面で非常に苦労が多かった事と推測する。その中で無事に調査を完遂できたのも、大阪府教育委員会や大阪府土木部を始めとする関係各位の御協力があったこそであり、関係者一同の御指導、御協力に感謝すると共に、今後ともさまざまな形での御支援をお願い申し上げます。

1994年3月31日

財団法人 大阪文化財センター

理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は、主要地方道大阪中央環状線内新金岡交差点立体工事に伴う新金岡更池遺跡の調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部より当センターに調査が委託され、調査課課長 中西 靖人、調査課第3係主幹兼係長 赤木 克視の指導の元に調査第3係主任技師 入江 正則が調査を担当した。遺構写真は第3係技師 立花 正治、調査員 久禮 孝志が担当し、遺物写真は主任技師 平井 貞子が担当した。
3. 調査に要した費用は、すべて大阪府土木部鳳土木事務所が負担した。
4. 現地調査は1993年10月15日より着手し、1994年2月3日に終了した。
5. 調査に当たっては、大阪府教育委員会、堺市教育委員会をはじめとする関係機関の御指導を賜った。特に、下記の方々には貴重な助言を賜った。記して感謝の意を表する。
＜大阪府教育委員会＞井藤 徹、福田 英人、山本 彰、＜堺市教育委員会＞池峯 龍彦、鹿野 吉則、續 伸一郎、野田 芳正、樋口 吉文、森村 健一「五十音順」
6. また調査報告書作成には、以下の方々の協力、支援があった。
(外業)＜大阪市立大学＞川辺 稔、吉川 長太、山本 順治、宮川 和幸、林 一步
(内業)内山 信子、松本 昭子、西田 久美、松村 より子、宮武 府子
7. 調査の実施にあたっては、以下の諸機関に作業を委託した。
航空測量 写測エンジニアリング株式会社
花粉・珪藻分析 パリノ・サーベイ株式会社
胎土・化学分析 株式会社第四紀地質研究所 井上 巖氏
8. 遺構実測図の標高は東京湾平均海面、方位は座標北を示している。
9. 遺物実測図は土器類を1/4、石製品が2/3の縮小率を基準とした。
10. 土色は、小山 正忠、竹原 秀夫編 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 『新版標準土色帖』第8版に依った。
11. 本書は、入江 正則が執筆し、内山 信子が編集した。

目 次

巻頭写真	
序文	
例言	
目次	
I 調査に至る経過	1
II 周辺の地理的、歴史的環境	2
III 調査の成果	5
1. 基本層序	5
2. 遺構	6
A) 旧石器、縄文、弥生時代	6
B) 古墳時代前期	6
C) 古墳時代中期	11
D) 古墳時代後期	11
掘立柱建物－1	11
掘立柱建物－2	11
掘立柱建物－3	12
掘立柱建物－4	12
掘立柱建物－5	12
掘立柱建物－6	13
掘立柱建物－7	13
掘立柱建物－8	13
掘立柱建物－10	14
掘立柱建物－11	14
掘立柱建物－12	14
溝－1	20
溝－3	20
溝－15	20
溝－18	20
溝－20・25	21
溝－24	21
溝－27	21

溝-29	22
溝-30・31	25
落込-1	25
落込-8	25
落込-10	25
落込-12	26
土坑-1~16 (土坑14・17を除く)	27
土坑-19~48 (土坑20・24・26・27・28・32・45を除く)	27
土坑-26	27
土坑-32	28
土坑-45	28
土坑-49~64 (土坑58・59を除く)	28
土坑-58	28
土坑-59	28
ピット-199	28
E) 奈良時代	28
掘立柱建物-13	29
溝-4	29
落込-6	29
土坑-14	29
土坑-53	29
ピット-175・176・261・262・279・302・305・316	30
F) 平安時代	30
G) 鎌倉時代	30
H) 室町時代	30
溝-22	30
溝-27・30	31
落込-7 A	31
I) 安土桃山時代	31
井戸-A	31
井戸-C	31
J) 江戸時代	33
落込-7 B	33
井戸-B	33

K) 近代	33
3. 遺物	34
A) 古墳時代後期	34
溝出土遺物	34
溝-27	34
溝-30	36
落込出土遺物	36
土坑出土遺物	37
ピット出土遺物	37
B) 奈良時代	38
溝-4	38
落込-6	38
土坑-14	38
土坑-53	38
ピット-261・262・279・302・305・316	38
C) 平安時代	39
D) 鎌倉時代	39
E) 室町時代	39
溝-22	39
落込-7 A	39
F) 安土桃山時代	40
井戸-A	40
G) 江戸時代	40
井戸-B	40
H) 開析谷	40
IV まとめ	44
A) 旧石器・縄文・弥生時代	44
B) 古墳時代前期	45
C) 古墳時代後期	45
D) 飛鳥・奈良時代	45
E) 平安時代	45
F) 鎌倉時代	46
G) 室町時代	46
H) 安土桃山時代	46

I) 江戸時代	46
J) 近代・現代	47
V 遺構の変遷	47
VI 覚え書き	49
1. 須恵器	49
2. 新金岡更池遺跡の集落構造	49
3. 器種構成	50

挿 図 目 次

図1 調査地周辺の現況(1)	1
図2 周辺の歴史的環境	3
図3 地区割り図	4
図4 調査地周辺の現況(2)	4
図5 昭和30年代の状況	5
図6 基本層序模試図	6
図7 遺構全体図	7、8
図8 台状部、掘立柱建物柱穴図	9、10
図9 掘立柱建物-1	15、16
図10 掘立柱建物-2	15、16
図11 掘立柱建物-3	15、16
図12 掘立柱建物-4	15、16
図13 掘立柱建物-5	15、16
図14 掘立柱建物-6	15、16
図15 掘立柱建物-7	17、18
図16 掘立柱建物-8	17、18
図17 掘立柱建物-10	17、18
図18 掘立柱建物-11	17、18
図19 塀-1	17、18
図20 掘立柱建物-12	17、18
図21 塀-2	17、18
図22 塀-3	17、18
図23 塀-4	17、18
図24 溝断面図(1)	23

図25	溝断面図（2）	24
図26	落込断面図	26
図27	土坑断面図	27
図28	ピット断面図	28
図29	掘立柱建物-13	29
図30	井戸断面図	32
図31	溝出土遺物	35
図32	落込出土遺物	36
図33	ピット出土遺物	38
図34	土坑・井戸出土遺物	39
図35	包含層出土遺物（1）	41
図36	包含層出土遺物（2）	43
図37	変遷図Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	53、54、55

写真目次

写真1	西側開析谷断面Ⅰ～Ⅳ層	6
写真2	ピット-215の断面・台状部Ⅳ・Ⅴ層	11
写真3	台状部・建物の柱穴群（東から）	11
写真4	掘立柱建物-1（西から）	12
写真5	掘立柱建物-1　ピット-104柱穴	12
写真6	掘立柱建物-2（北東から）	12
写真7	掘立柱建物-2　ピット-97柱掘方	12
写真8	掘立柱建物-3・8（東から）	13
写真9	掘立柱建物-4（北西から）	13
写真10	掘立柱建物-4　ピット-133柱掘方	13
写真11	掘立柱建物-5（南西から）	13
写真12	掘立柱建物-6（東から）	14
写真13	掘立柱建物-6　ピット-39柱根	14
写真14	掘立柱建物-6・7（北西から）	14
写真15	掘立柱建物-7（北西から）	14
写真16	掘立柱建物-10（南西から）	19
写真17	掘立柱建物-12掘削前（南東から）	19
写真18	掘立柱建物-12掘削後（南東から）	19

写真19	堀-2 (北西から)	19
写真20	堀-3 (南から)	19
写真21	ピット-162柱掘方断ち割り	19
写真22	開析谷底面 (西から)	20
写真23	開析谷底面 (東から)	20
写真24	開析谷底面. 溝-1 (南西から)	20
写真25	溝-24 (東から)	21
写真26	溝-24・25 (北東から)	21
写真27	溝-25 (北東から)	21
写真28	溝-27 (北から)	22
写真29	溝-27 (北東から)	22
写真30	溝-29 (北東から)	22
写真31	溝-29 (北から)	22
写真32	溝-27・29・31西側開析谷	25
写真33	開析谷・落込底面の足跡	25
写真34	落込断面. 底面に足の踏み込み跡	25
写真35	落込-8 (北から)	26
写真36	土坑-59 (南西から)	27
写真37	掘立柱建物-13 (北から)	29
写真38	井戸-A (南から)	33
写真39	井戸-B (東から)	33
写真40	土坑-7 出土石鏃	37
写真41	Ⅲ層出土墨書土器	42
写真42	溝出土遺物	57
写真43	ピット出土遺物	57
写真44	包含層出土遺物 (1)	58
写真45	包含層出土遺物 (2)	59

表 目 次

表 1	器種構成表	52
表 2	掘立柱建物一覧表	60
表 3	堀一覧表	60
表 4 - 1	溝一覧表	60

表4-2	溝一覧表	61
表5	落込一覧表	61
表6-1	土坑一覧表	61
表6-2	土坑一覧表	62
表7	井戸一覧表	63
表8-1	ピット一覧表	63
表8-2	ピット一覧表	64
表8-3	ピット一覧表	65
表8-4	ピット一覧表	66
表8-5	ピット一覧表	67
表8-6	ピット一覧表	68
表8-7	ピット一覧表	69
表9-1	出土遺物一覧表	70
表9-2	出土遺物一覧表	71

付章

新金岡更池遺跡における 自然科学調査報告

はじめに

1. 試料	2
2. 分析方法	2
(1) 珪藻分析	2
(2) 花粉分析	2
3. 微化石の産状	5
(1) 珪藻化石	5
(2) 花粉化石	5
4. 堆積環境	6
5. 古植生	19
(1) 花粉化石群集の特徴	19
(2) 森林植生	19
(3) 低地の植生と栽培植物	20
引用文献	20

表 1. 分析試料の一覧	3
表 2. 珪藻の生態性	4
表 3. 珪藻分析結果	7、8、9、10、11、12
表 4. 花粉分析結果	17、18
図 1. 主要珪藻化石群集の層位的分布	13、14
図 2. 花粉化石群集の層位的分布	15、16
図版 1. 珪藻化石 (1)	23
図版 2. 珪藻化石 (2)	24
図版 3. 花粉化石	25、26

I 調査に至る経過

大阪府下の主要な幹線道路であり、大阪を通過する車両を市内に入るまでに迂回させる機能も合わせ持つ主要地方道大阪中央環状線は、近年通過車両の増加から主要交差点で交通渋滞を引き起こし、交通政策上問題となっていた。そこで、この様な問題を解消するために中央環状線の幾つかの主要交差点で立体交差化が計画されたが、今回の対象となった堺市新金岡に所在する新金岡交差点もその内の一つである。この他に東大阪市の巨摩橋交差点と松原市丹南交差点の立体化工事が計画されている。

調査地点となった新金岡交差点は、大阪市内と大阪府南部を結ぶ幹線道路である主要地方道大阪高石線と主要地方道大阪中央環状線が交差しており、日常的に渋滞が起きている箇所である(図4)。この交差点の立体交差は、周辺が住宅地であるため静かな環境を要求される事もあって、中央環状線側を地下に通す方式で建設される事になった。このため調査面積が広大なものとなっている。

調査は大阪府土木部鳳土木事務所が計画立案し、大阪府文化財保護課と協議の上、財団法人大阪文化財センターに委託された。調査範囲は大阪府教育委員会の試掘調査により、新金岡交差点西端部から、西へ140mまでとされた。幅は20mである。現地調査は1993年10月15日に機械掘削、10月29日より人力掘削に着手し、1994年2月3日に終了した。

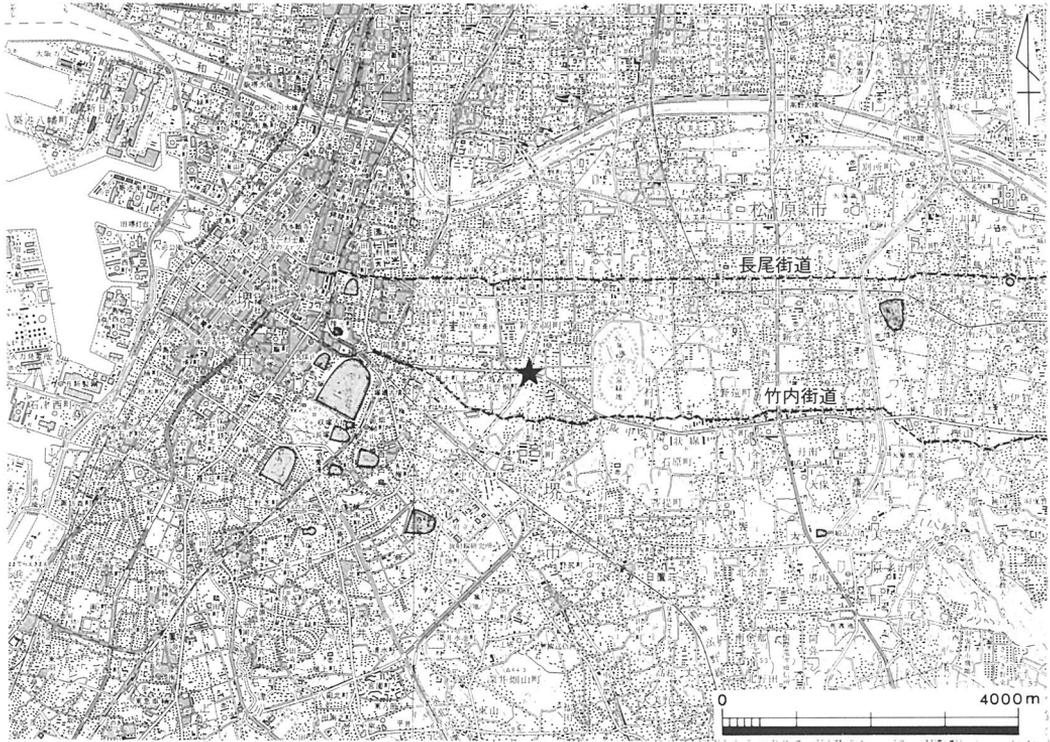


図1 調査地周辺の現況(1) 1 : 100,000

II 遺跡周辺の地理的、歴史的環境

当遺跡は、南側の泉北丘陵より派生する中位段丘面上に立地している。この中位段丘面は、堺市の北部から大阪市域の上町台地に連なる広大な平坦面を有しており、北に向かって緩やかに下降している。この中位段丘面は、段丘層形成時やその後の浸食により開析谷が随所に刻まれている。これらの開析谷の中には、自然もしくは人為的に埋め立てられたものも多く、現状の平坦な地形からは推測できないが、地下に起伏に富んだ埋没地形として存在している。

また、中位段丘面上に残された開析谷には、谷を堰き止めて造られた溜池が多数存在する。遺跡内にも南東方向へ奥深く延びる開析谷があり、そこにも更池や下津池等の多くの溜池が造られていた。この地域も、近年まではそうした多くの溜池が分布する昔ながらの田園風景が残されていたが、最近では都市化が進むと共に溜池も次第に埋め立てられ、昔の景観も次第に消えつつある。既に、遺跡名の由縁となった更池や下津池も埋め立てられて消滅している。

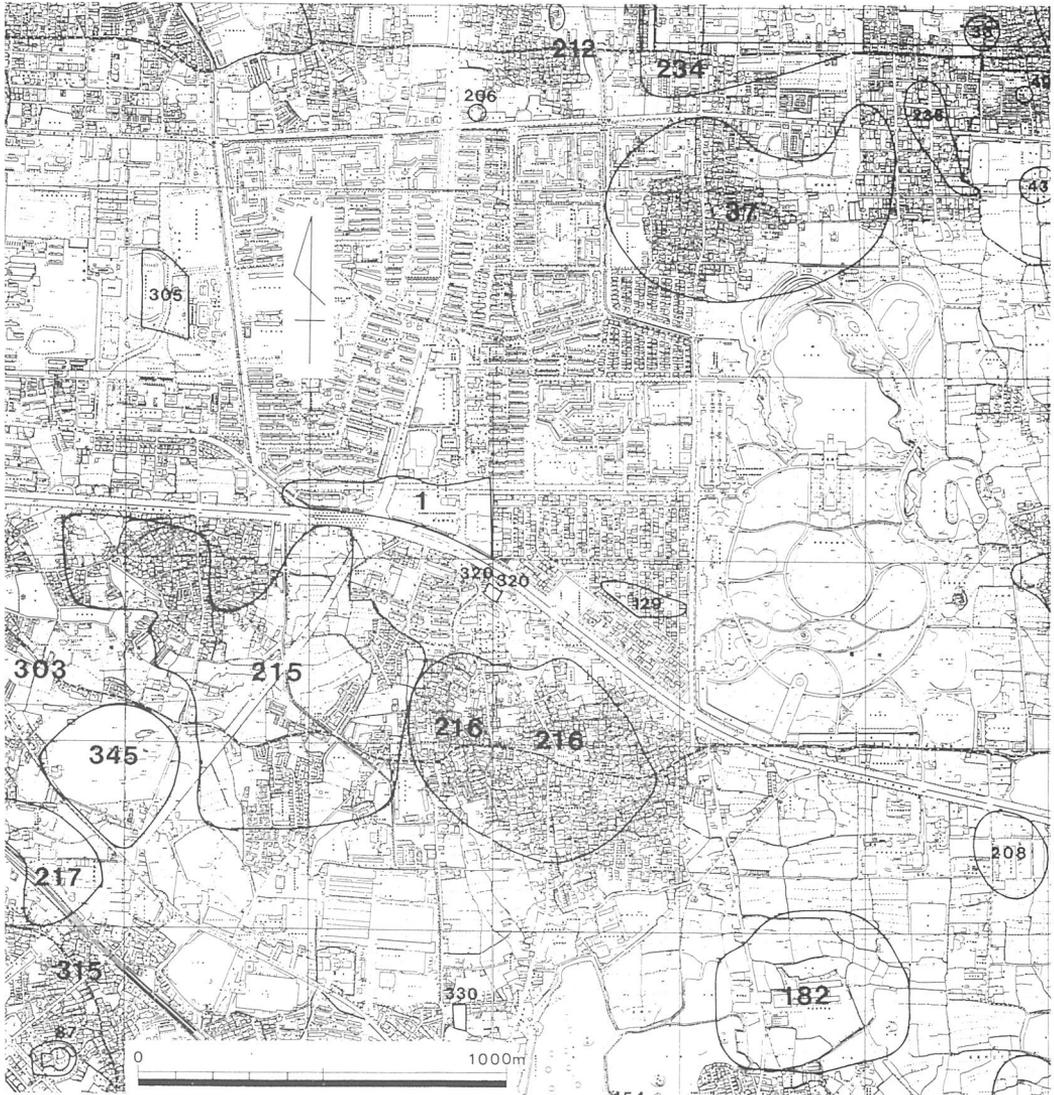
調査区中央部の中位段丘面の標高は約18mを測るが、東側と西端側は開析谷内に入る。北東側の開析谷には、狭間川が流れている。現状では幅の少し広いコンクリート製の溝としか見えないが、かつては名称を持つに値する河川であった。狭間川は、大和川付け替え以前は西除川から取水し、中位段丘上を横切って住吉大社方面に流れた後に住吉の津を経て大阪湾に注ぎこんでいた流路であったとも考えられる。狭間川がもし住吉から西除川へ通じていたとすると、運河的要素を併せ持った河川の可能性も考えられなければならない。もしそうであれば新金岡更池遺跡が狭間川に面した位置に立地している事は非常に重要な意味を持っていると考えられる。

周辺の遺跡では旧石器時代の遺物を数多く出土した北花田遺跡がある。しかし縄文時代、弥生時代では周辺に著名な遺跡は見当たらない。むしろ大阪湾沿岸部に四ツ池遺跡等の拠点集落遺跡が見られる。中位段丘上では縄文、弥生時代の遺跡は殆どみられないが、少量であるが遺物は出土している。必ずしも当時の人々にとって無縁の土地ではなかったようである。

当遺跡の西側に位置する土師川に沿った範囲と大阪湾の海岸線に沿った中位段丘上には百舌鳥古墳群が造営されて、古墳時代中期に全国的にも非常に重要な位置を占めていた事が推測される(図1)。そしてまた当遺跡の南側に隣接する長曾根遺跡ではこれまでに古墳時代前期を始めとして中期、後期と続き、奈良、平安、中世の遺構が見られる。遺構は各時代を通じて遺跡内の場所を変えてはいるものの、絶える事無く継続していたようである。

古墳時代前期には長曾根遺跡から布留式土器が出土している。中位段丘上にある浅い窪んだ地形や開析谷に水田を営んでいたようである。古墳時代中期、後期には竪穴住居や掘立柱建物が建てられ、溝が段丘上面に掘られており、この頃に調査地周辺の中位段丘上の開発が開始されたようである。この頃の開発は長曾根遺跡だけが単独で始められたのではなくて、南河内の中位段丘上全体で開発が始まり、各地に集落が出現し始めたようである。これは6世紀後半かあるいは7

世紀初頭頃のある時期に、西徐川の上流に狭山池を築造して、農業用水を貯え始めた事を契機としている。この溜池築造と共に、今まで水を得られなかった中位段丘上の尾根筋に水を供給する灌漑用水路網も掘られた。この結果、これまで開発がなされず樹木の生い茂るままの自然の姿であった中位段丘上は、溜池築造と用水網の整備という2つの大作業を経てようやく大規模な開発が始められたようである。そして新しい集落が中位段丘上のあちらこちらに出現しはじめる。このような大規模開発の波が新金岡更池遺跡や長曾根遺跡にも押し寄せていたと考えられる。



- | | | | |
|------------|----------------|----------------|-------------------|
| 1. 新金岡更池遺跡 | 129. 金田遺跡 | 216. 金岡神社遺跡 | 315. 西高野街道 |
| 33. 正殿遺跡 | 182. 金岡遺跡 | 217. 中百舌鳥遺跡 | 320. 金岡幸田池遺跡 |
| 37. 南花田遺跡 | 206. 蔵前町遺跡 | 234. 船堂東遺跡 | 330. 金岡長池西遺跡 |
| 43. 鍵田遺跡 | 208. 石原町北遺跡 | 236. 東花田遺跡 | 345. 地下鉄中百舌鳥検車場遺跡 |
| 49. 今在家遺跡 | 212. 長尾街道（大津道） | 303. 竹内街道（丹比道） | |
| 87. 尼塚古墳 | 215. 長曾根遺跡 | 305. 金岡公園遺跡 | |

図2 周辺の歴史的環境 1 : 20,000

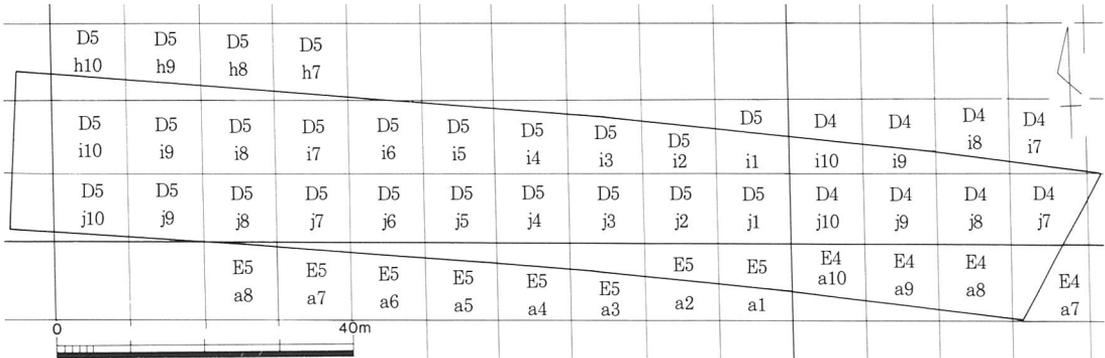


図3 地区割り図 1 : 1,000

次の奈良時代には調査地の南約500m付近に古代の官道である竹内街道（丹比道）が作られたらしく、難波と大和を結ぶ交通路が公的に整備されていたようである。また調査地の北側には大津道が通っており、古代の2つの官道に挟まれた所に当遺跡は位置していた。また長曽根遺跡では奈良時代及び平安時代の掘立柱建物の集落も検出されている。中世には大溝が掘られ、竹之内街道に面した位置に城館が設けられて交通網を支配していたようである。

このように調査地周辺は5世紀代の大和政権にとって主要な位置を占め、律令期には街道が整備され重要な情報の伝達網と物資の輸送網の中に存在していた。中世社会の激動も河内を震源地とした動きの中に組み込まれていたと考えられ、歴史的にも各時代ごとに重要な役割を果たしていたと考えられる土地である。

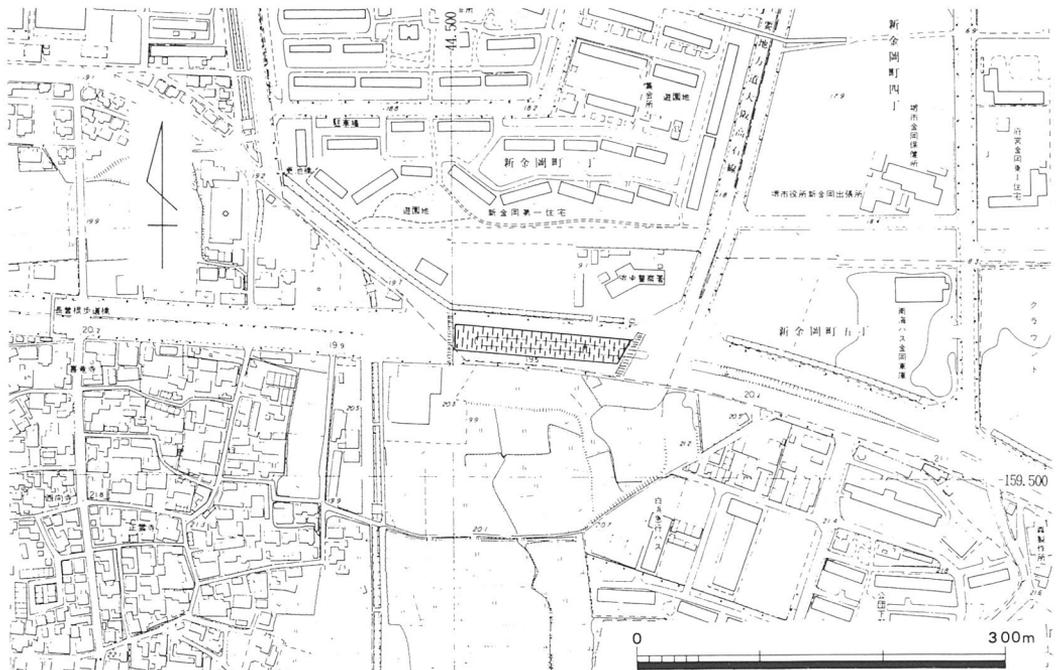


図4 調査地周辺の現況(2) 1 : 6,000



図5 昭和30年代の状況 1 : 6,000

III 調査の成果

1. 基本層序 (図6 写真1・2)

当調査地は、中位段丘面である中央の台状部と東と西の開析谷の2つの地形に分かれる。基本層序は、旧耕作土であるI層が全面を覆うが、その下層は開析谷と台状部で異なる。東側の開析谷では上層からII層、III層がある。これらの層は、中央環状線が開通するまで調査地北側に存在していた更池が江戸時代には調査地を含んで大きく広がっており、この時に堆積した土層である。II層上面が第1面、III層上面が第2面である。この下層に中世までの遺物を含むIV層があり、この上面が第3面になる。この面で本来あったであろう水田が検出できなかったのは、近世前期に更池を築造した時に削平を受けたためと思われる。IV層の下に溝、落込がある。これが第4遺構面である。西側開析谷も同様に堆積している。中世のIV層の下に砂層からなるVII層が堆積しているが、遺物は出土しなかった。この下層は礫層となり、中位段丘礫層であるようだ。

中央台状部は東西の開析谷のVII層から約1.1m高い。黄灰色粘質土層の中位段丘層の上面は古墳時代後期の遺構面で開析谷の第4遺構面に対応している。第4遺構面の上面にV層、VI層が堆

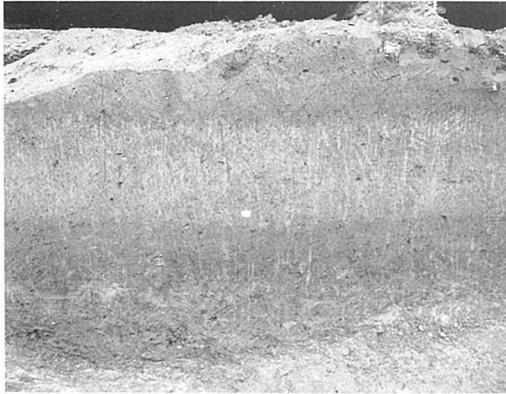


写真1 西側開析谷 I～IV層

積している。VI層は暗茶色粘土層で古墳時代集落跡の上層に堆積した包含層である。V層は包含層の上層に堆積した古代と思われる層でこの上層には耕作土層のI層が覆っている。I層上面は平坦で一見して下層に開析谷が存在するとは分からない。

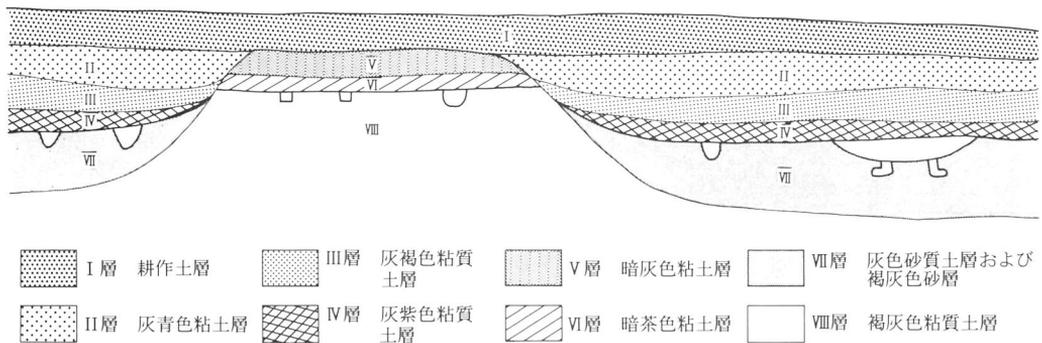


図6 基本層序模試図

2. 遺構

全体を各時代順に、そして地形上の特質から東側開析谷、中央台状部、西側開析谷の名称で必要に応じて分けて説明を行いたい。

A) 旧石器、縄文、弥生時代

旧石器時代か、あるいは縄文時代かと思われる石器の剥片が10点出土している。開析谷内の後世の堆積層から出土しており、原位置で出土したものは無い。遺構も全く検出されなかった。

B) 古墳時代前期

集落跡を覆う包含層V、VI層から布留式の甕、壺の破片が数点出土している。調査区内にこの時期の遺構が見られない事から調査区外にあった土器が運ばれて来た可能性が考えられる。この事は近くに古墳時代前期の遺構がある事を示している。(以上堺市埋文センター樋口吉文氏より御教示)

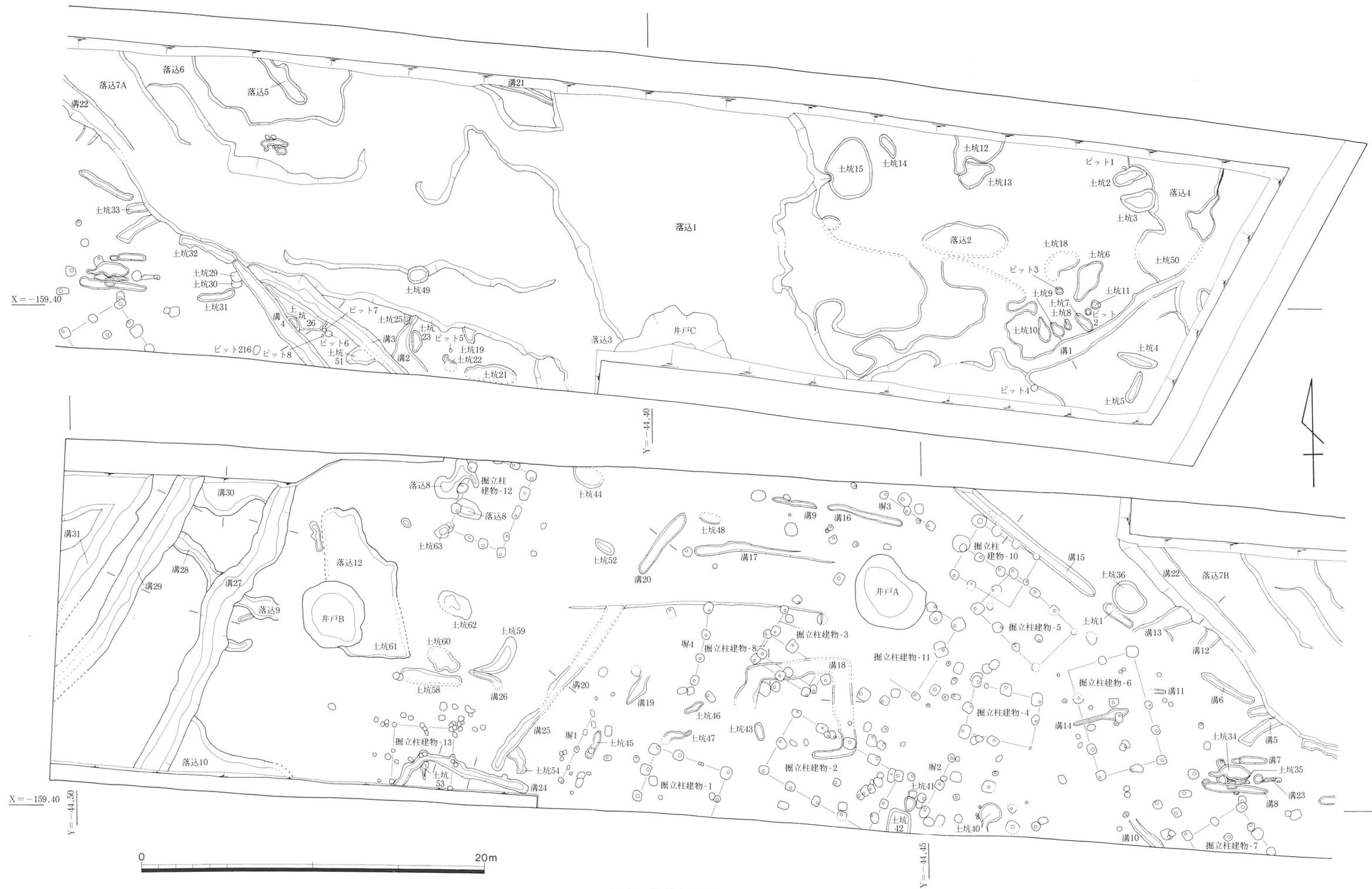


図7 遺構全体図 1 : 250

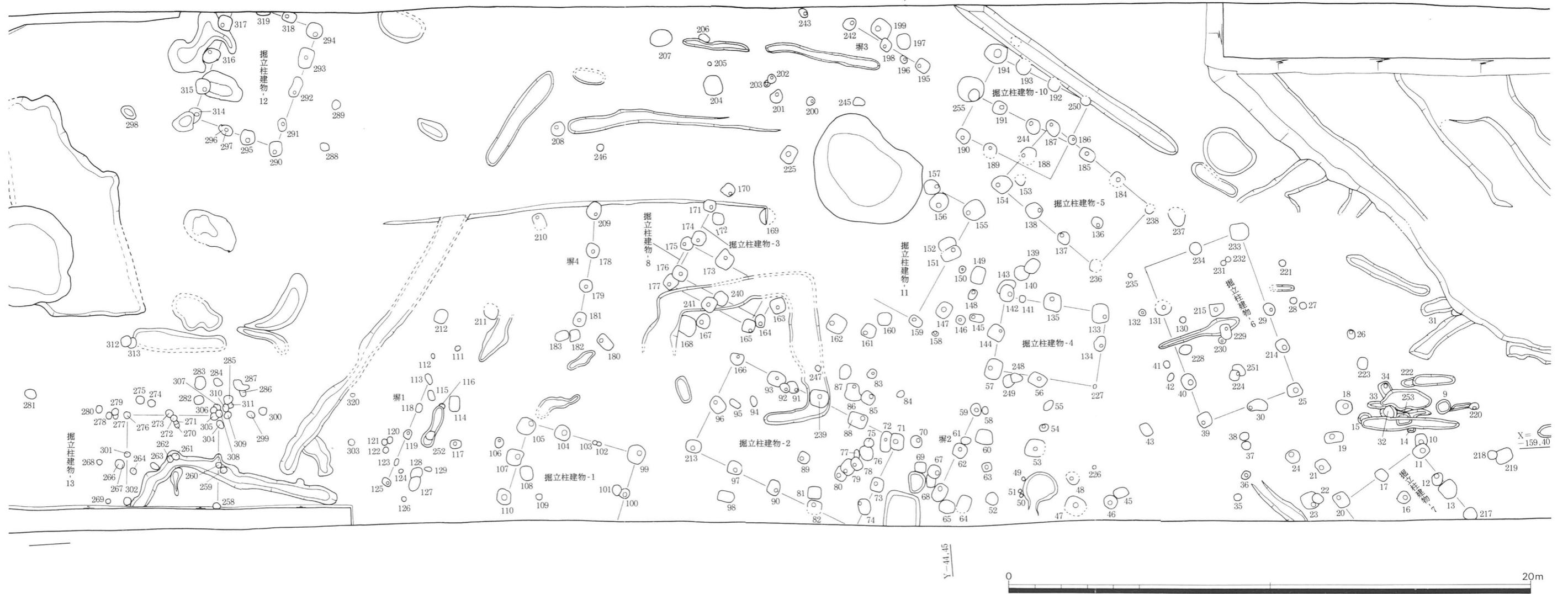


图8 台状部. 掘立柱建物柱穴图 1 : 160

C) 古墳時代中期

長曾根遺跡全体では古墳時代前期から継続しているが、当調査区ではこの時期の遺構・遺物とも全く検出されなかった。

D) 古墳時代後期

これまで遺構が無かった台状部に掘立柱建物が11棟建てられて集落が形成される。溝も掘られる。建物は一部分の建物（建物3と8、5と10）で重複している所があるが、他は重ならない。この頃の土器が建物の柱穴内や溝等から出土しており、大半の建物は6世紀後半頃と考えられる。

東側開析谷は、落込が掘られる。溝を掘って開析谷を開発して、調査区外の開析谷に水田を営んでいたと考えられる。この後に何らかの理由で集落が廃絶すると共に開析谷は湿地化していったと考えられる。

西側開析谷にも落込があり、この部分は埋没した湿地に溝が掘られて、灌漑用水が人工的に導かれている可能性がある。西側開析谷でも同様に調査区外に水田を営んでいた可能性がある。

集落は溝15と溝20・25に囲まれた区画の中に建てられている。掘立柱建物12は区画溝20・25の外側に建てられているが、建物構造が他と少し違っており、何か少し違った意味の建物の可能性がある。調査区内の最大の建物は4間×2間である。底を持った建物は存在しない。また倉庫は調査区内に1棟認められる。古墳時代集落に伴う井戸は調査区内には発見できていない。

掘立柱建物－1（図7・9 写真4・5 表2）

調査区南西側にあり、3間×2間分調査した。このまま3間×2間で完結するのか、南に延びるかは不明であるが、恐らくはこれで完結すると思われる。そうすると東西棟となる。柱穴部分に焼けた土が入っている事から焼失した家屋の可能性がある。柱掘方は大きく、長辺で約80cmを測る。柱穴の太さは約20cmを測る。

掘立柱建物－2（図7・10 写真6・7 表2）

調査区南東側にあり、掘立柱建物1の東側にある。4間×2間の東西棟で、調査区内の最も大

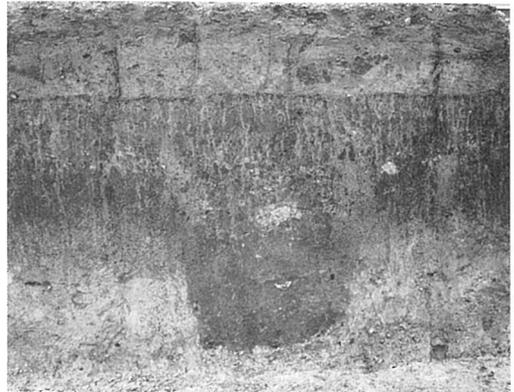


写真2 ピット215の断面・台状部Ⅳ・Ⅴ層

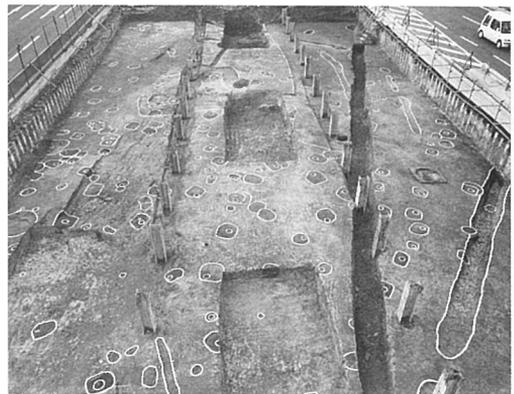


写真3 台状部 建物の柱穴群（東から）

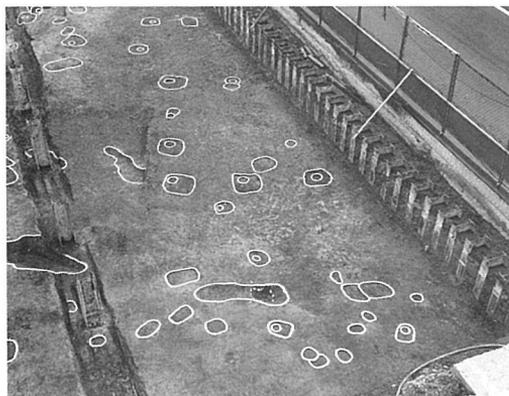


写真4 掘立柱建物-1 (西から)



写真5 掘立柱建物-1. ピット-104柱穴

きな建物の一つである。束柱は見られない。柱穴内に焼けた土が混じっており、この建物も焼失した可能性がある。

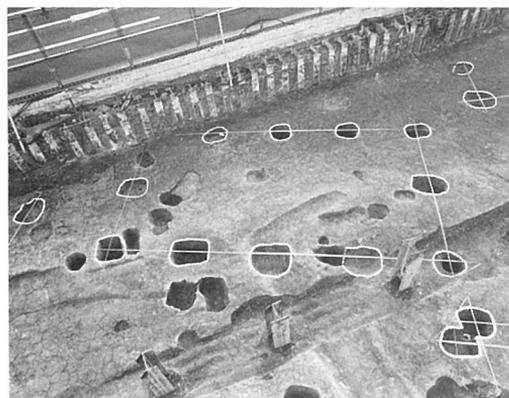


写真6 掘立柱建物-2 (北東から)

掘立柱建物-3 (図7・11 写真8 表2)

調査区西中央にあり、全体の規模は掘立柱建物8と方向を同じくして重複している。東側は削られて、全体の規模は分からない。2間×2間が判明しているが、これで完結しているかどうかは分からない。柱掘方も少し小型で60cm四方である。建物も残っている部分は正方形に近い形である。

掘立柱建物-4 (図7・12 写真9・10 表2)

集落の中央付近に位置している。2間×2間の建物の東西棟である。束柱は見当たらない。柱掘方は大きく60×80cmを測る。この集落の中では小型の建物である。

掘立柱建物-5 (図7・13 写真11 表2)

溝15に平行な建物で、掘立柱建物10と重複している。両者は直接重なっていないので、前後関係は分からない。2間×3間の北西から南東方向の主軸方位を持つ。柱掘方は長辺50~70cmを測る。東端の柱穴の東側は削られているので、東側にまだ延びるのか分からない。



写真7 掘立柱建物-2. ピット-97柱掘方

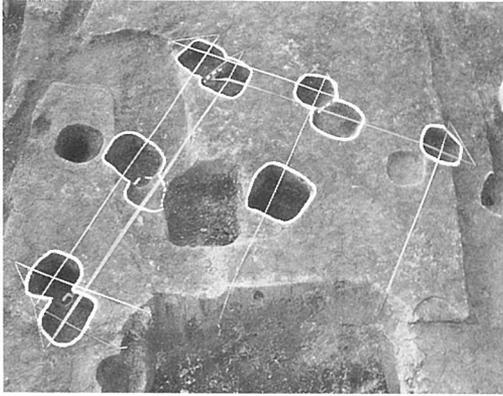


写真8 掘立柱建物-3・8 (東から)

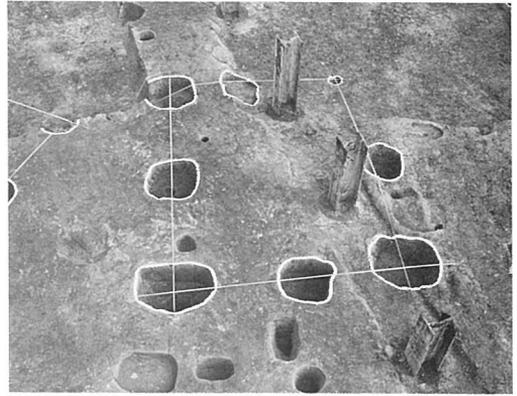


写真9 掘立柱建物-4 (北西から)



写真10 掘立柱建物-4. ピット-133柱掘方
掘立柱建物-6 (図7・14 写真12・13・14 表2)

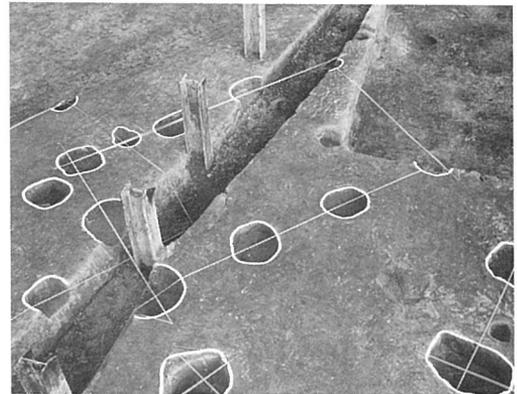


写真11 掘立柱建物-5 (南西から)

集落の東側にあり、開析谷に近い位置である。主軸方位は北西から南東方向であるが、南北に近い。4間×2間の建物規模と思われるが、北端は削られてははっきりしない。柱掘方は60~80cmを測る大型のものである。柱根が3か所の柱痕部分の底に残っていた。柱根上部は腐って尖がり根元部分は多少腐っているけれども直径15cmを残している。もし柱根が腐食していなければ20cm前後の太さがあったと思われる。

掘立柱建物-7 (図7・15 写真14・15 表2)

集落の最も東南端にあり、2間×2間の範囲まで調査しているが南側にどこまで延びるか分からない。北西から南東方向の主軸を持つ。柱掘方は40~60cmで少し小型である。

掘立柱建物-8 (図7・16 写真8 表2)

集落の西側にあり、掘立柱建物3と重複している。2間×1間まで明らかになっている。これ以上南東方向には延びないようであるが、後世の削平が著しく、いまひとつ分からない。判明している成果からは小型の建物となる。主軸方位は北西から南東方向である。この建物の規模が集落内では小さいので、本来は2間×2間かそれ以上の規模であったと推測される。柱掘方は60cm四方である。掘立柱建物3より古い建物である。



写真12 掘立柱建物-6 (東から)

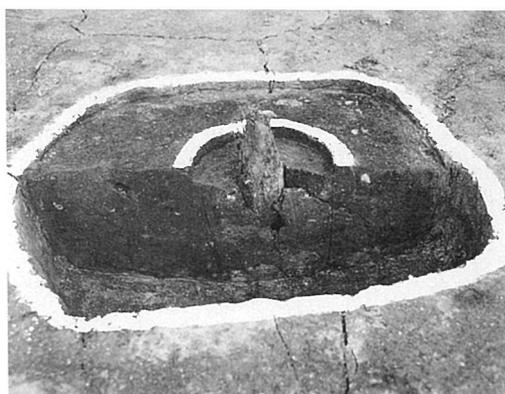


写真13 掘立柱建物-6. ピット-39柱根 (南西から)

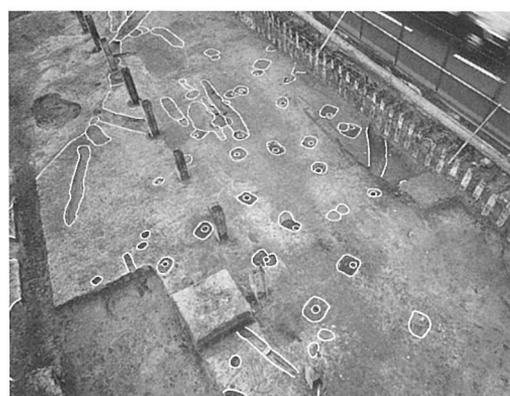


写真14 掘立柱建物-6・7 (北西から)

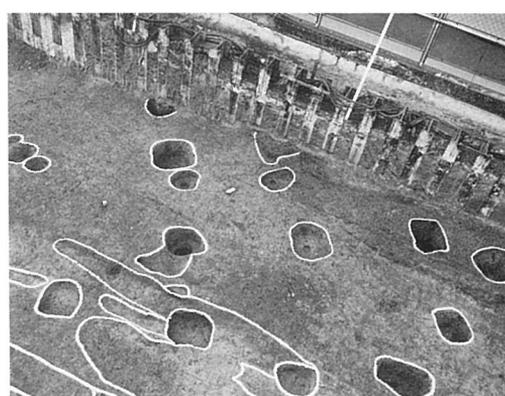


写真15 掘立柱建物-7 (北西から)

掘立柱建物-10 (図7・17 写真16 表2)

集落の北端に位置している。2間×3間の東西方向から少し振れた主軸方位である。柱掘方は小型で50cm前後の隅丸方形である。束柱が伴っている建物である。建物面積は柱数は多いけれども柱間寸法が狭いので他の建物と比較して変わらない。掘立柱建物10は溝15より後出である。溝が埋没したのちに柱掘方が掘られている。掘立柱建物5と一部重複しているが、前後関係は分からない。

掘立柱建物-11 (図7・18 表1)

集落の中央付近に位置している建物である。東側の柱列がかろうじて残っているが、西側は大きな攪乱と近世の井戸に削られてほとんど分からない。とりあえず1間×3間の規模に復元している。本来はもう少し大きな建物で西側にもう1間あって2間×3間の規模であったと推測される。この建物の主軸方位は北東から南西で、柱掘方は70cm×80cmを測る。

掘立柱建物-12 (図7・20 写真17・18 表2)

集落の西側に位置して、溝25より西側にある3間×4間の建物で主軸方位は北東から南西である。柱間寸法が他の建物と比較して非常に狭いので結果的に他の建物の大きさとほとんど変わらない。

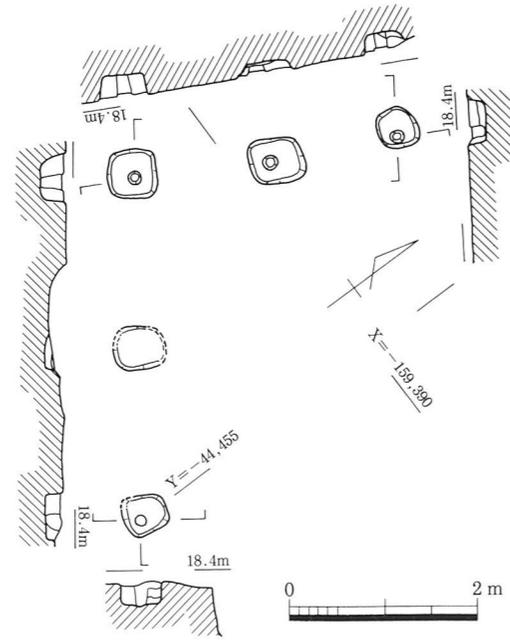


图11 掘立柱建物-3 1:80

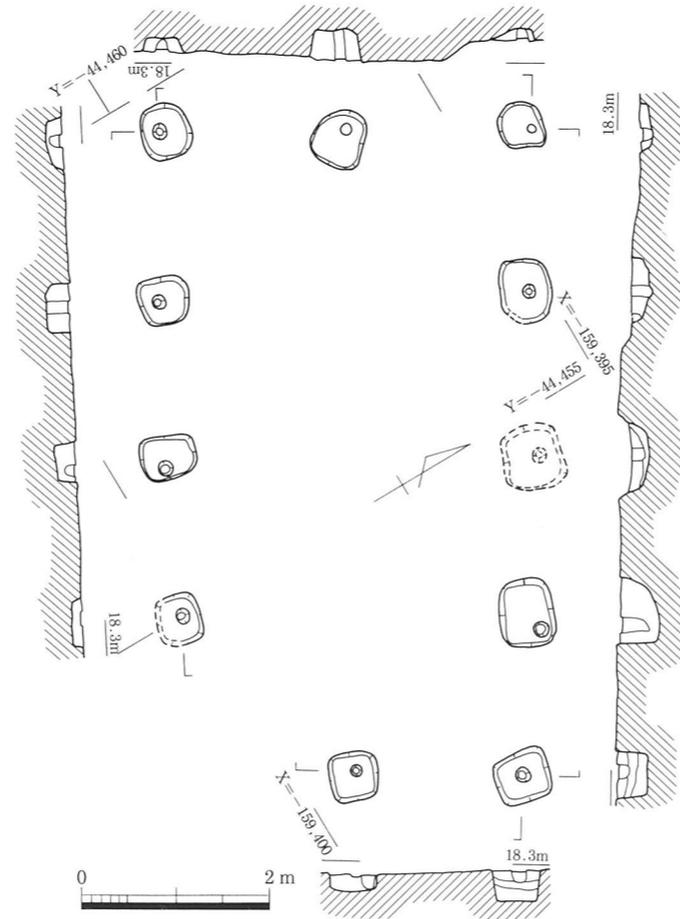


图10 掘立柱建物-2 1:80

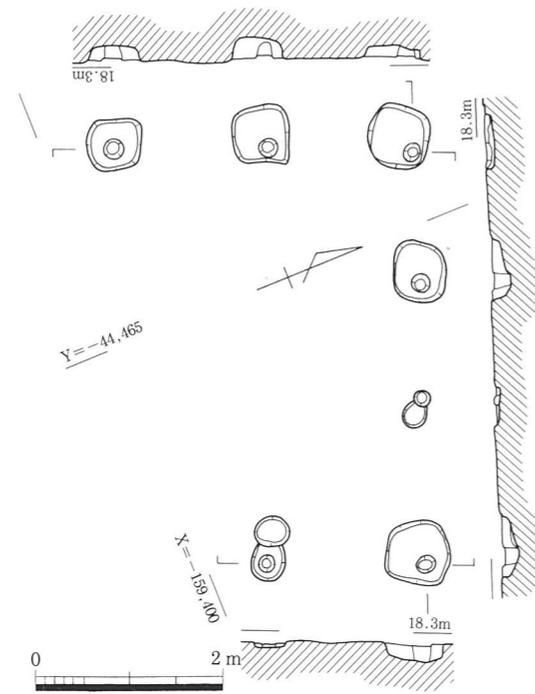


图9 掘立柱建物-1 1:80

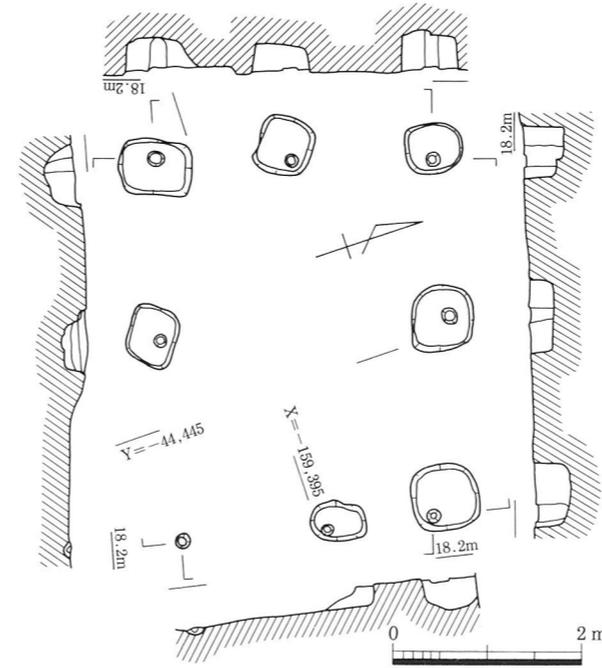


图12 掘立柱建物-4 1:80

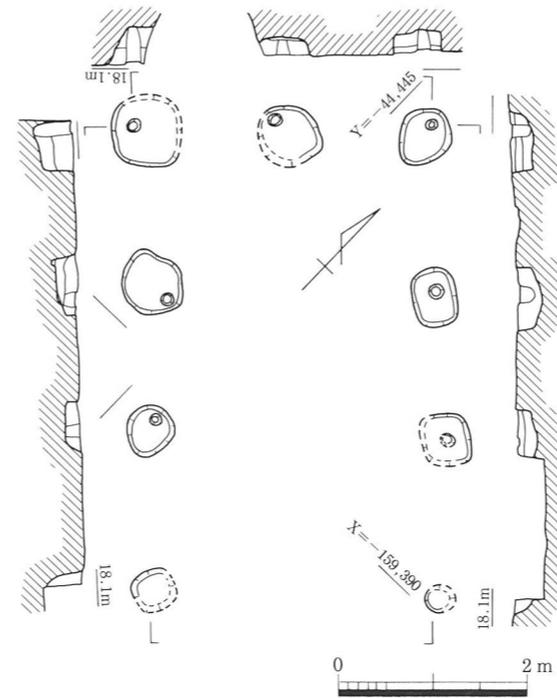


图13 掘立柱建物-5 1:80

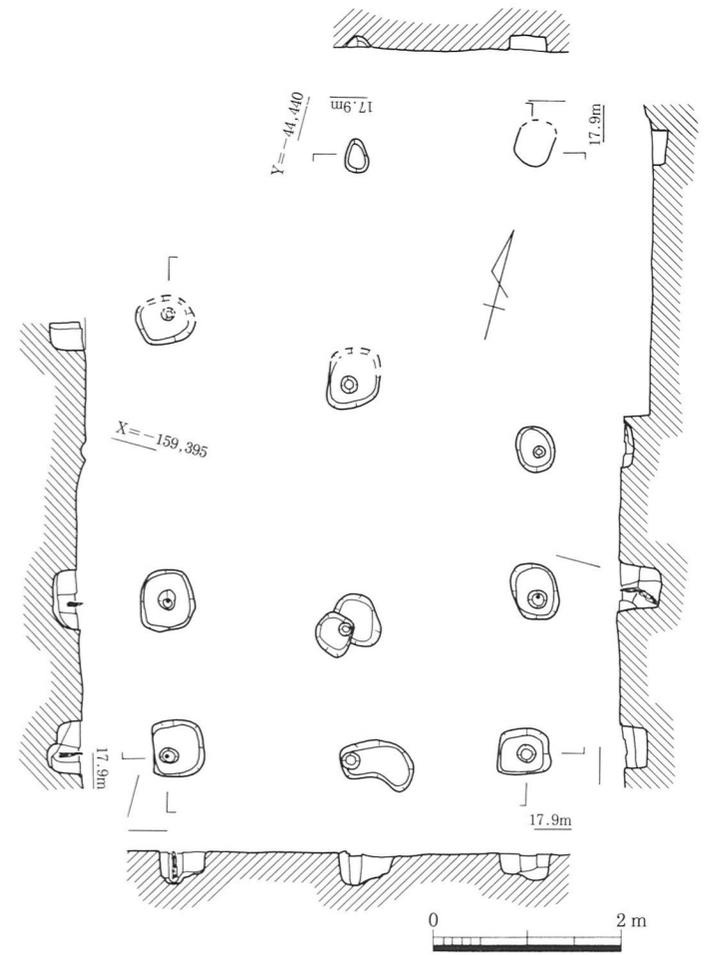


图14 掘立柱建物-6 1:80

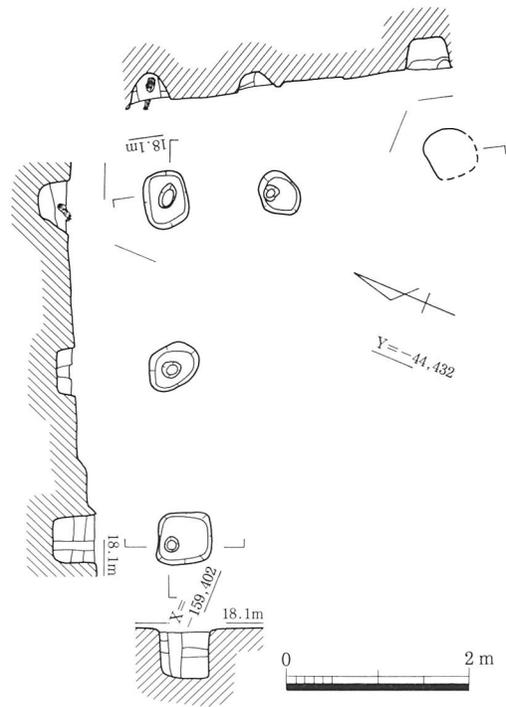


图15 掘立柱建物-7 1:80

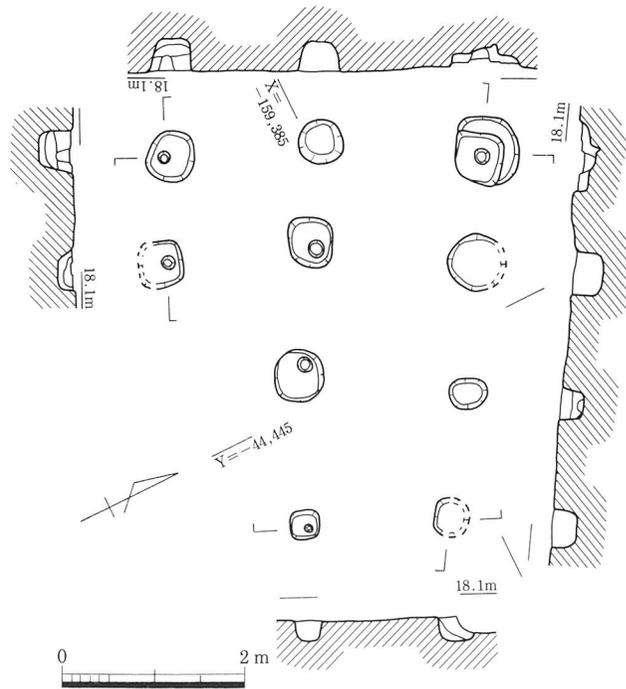


图17 掘立柱建物-10 1:80

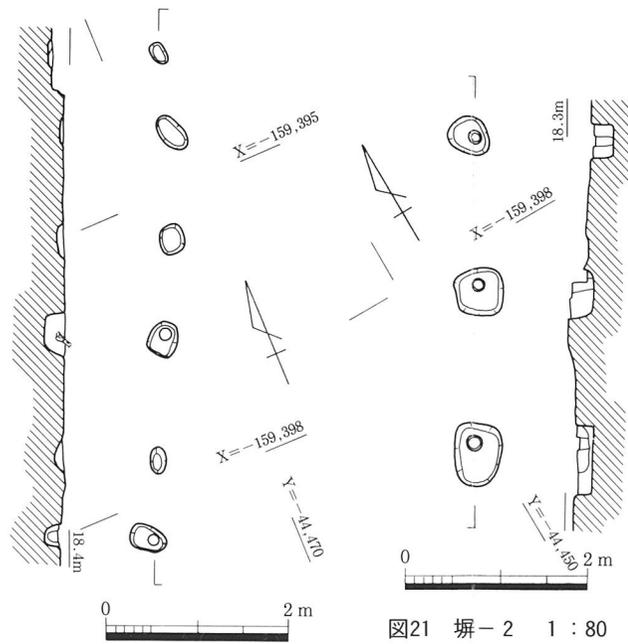


图19 堀-1 1:80

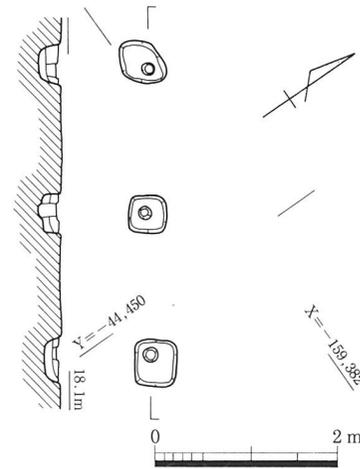


图22 堀-3 1:80

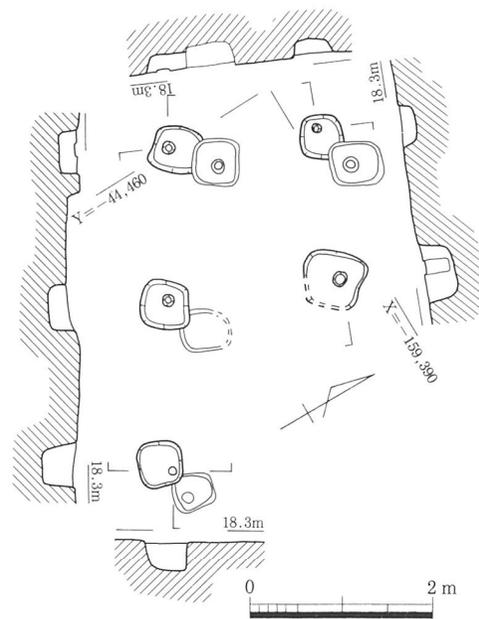


图16 掘立柱建物-8 1:80

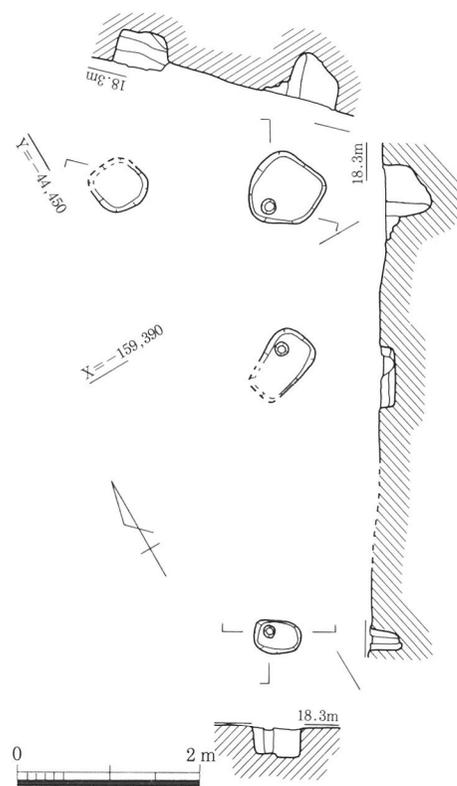


图18 掘立柱建物-11 1:80

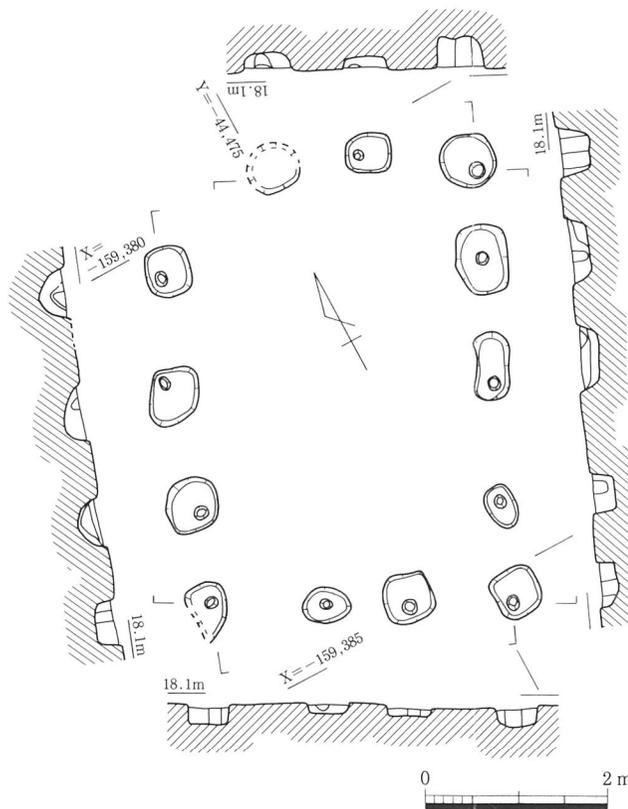


图20 掘立柱建物-12 1:80

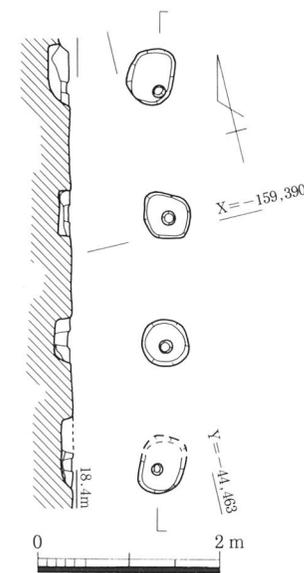


图23 堀-4 1:80

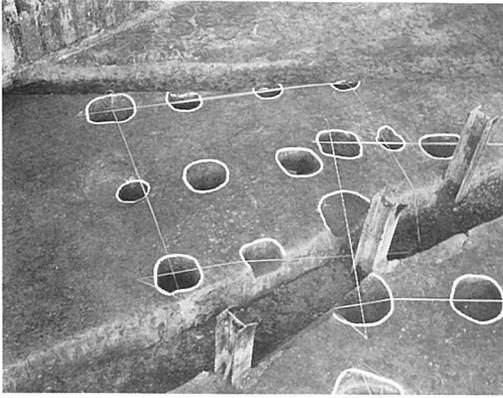


写真16 掘立柱建物-10 (南西から)

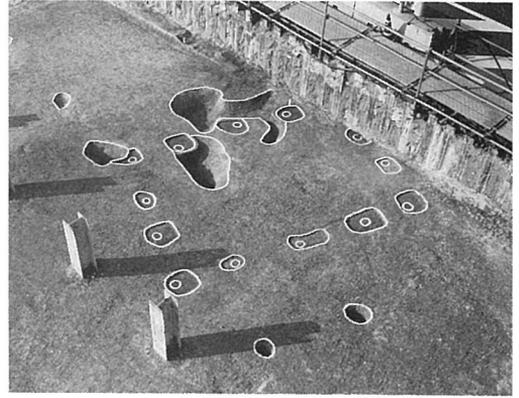


写真17 掘立柱建物-12掘削前 (南東から)

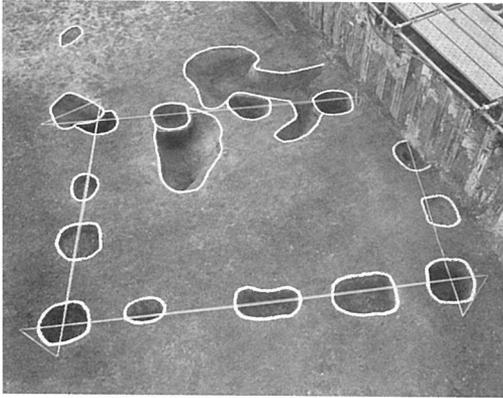


写真18 掘立柱建物-12掘削後 (南東から)

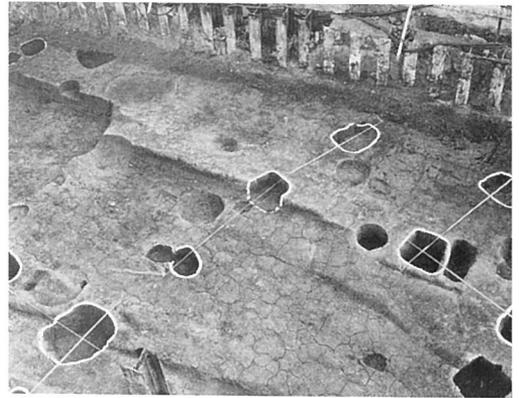


写真19 堀-2 (北西から)

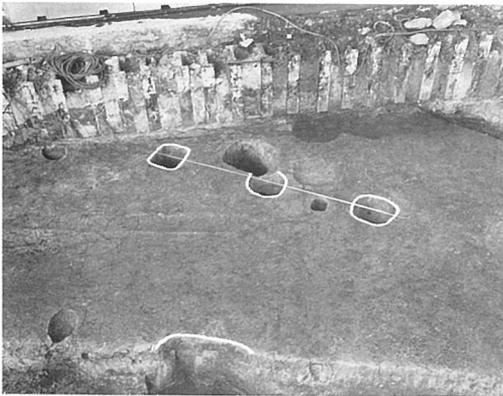


写真20 堀-3 (南から)



写真21 ピット-162柱掘方断ち割り



写真22 開析谷底面（西から）

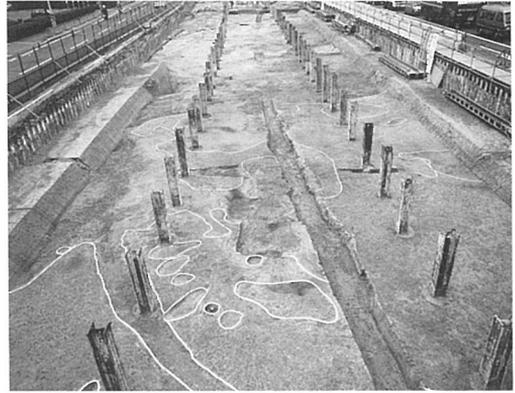


写真23 開析谷底面（東から）



写真24 開析谷底面・溝-1（南西から）

溝-1（図7・24 写真24 表4-1）
東側開析谷の東隅を南西から北東に流れる溝である。南西にある落込1から北東側の落込に流れ込んでいる。この溝は開析谷底部を複雑に網状に流れていた流れの一部分を掘って落込を結んでいたものらしい。周辺には落込状の浅く窪んだ遺構が幾つかある。これらの遺構や自然の窪み的な落込が廃絶した後に、IV層が堆積している。浅い湿地であったらしい。

溝-3（図7・24 表4-1）
南東側の中位段丘上から開析谷の縁に流れ出てきた溝である。調査区内のこの地点で開析谷内に流入していたようである。台状部上の北西側に存在する溝15とは埋土が異なっているもののはほぼ一直線に並んでいる。溝の性格は同じで区画溝であった可能性もある。

溝-15（図7・24・31-29 表4-1）
掘立柱建物群の北東隅を区画している。溝15が埋没した後に掘立柱建物10が建てられている。溝3・4と溝15とは方向が非常に類似している。溝15の底の高さは17.66m、溝3の底も同様に17.66mである。溝3と溝15とは直線にならないけれども、集落の北東を区画していた可能性も考えられる。溝3は区画溝の役割があり、溝15は区画溝と灌漑用水路の2つの性格を併せ持った溝と考えられる。2つの溝の性格の微妙な違いが溝の埋土の違いとして現れているのかも知れない。

溝-18（図7・24 表4-1）
方形に巡る周溝状遺構の一部と考えられる。この溝から土師器の小さな破片が出土しているが、詳しい年代が分かる資料ではないので、古墳時代後期の他の遺構と同じ頃の遺構なのかどうかははっきりしない。掘立柱建物2・3・8の柱穴は溝18に削られているので建物の方が古い。ま

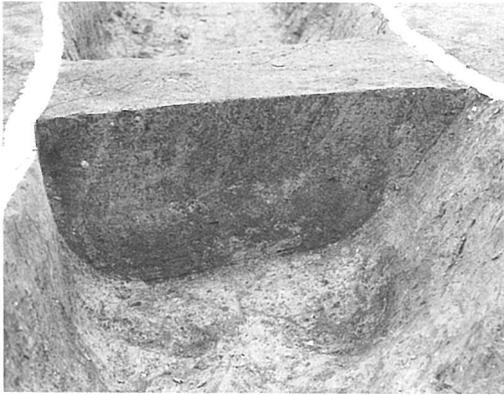


写真25 溝-24 (東から)

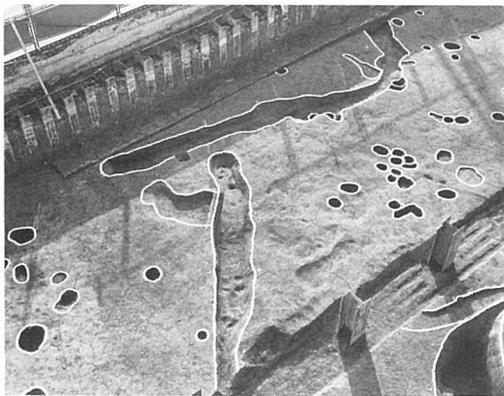


写真26 溝-24・25 (北東から)



写真27 溝-25 (北東から)

た周溝内の三方の隅に既存の掘立柱建物に復元できていない柱穴がそれぞれ1個ある。そうすると1間×1間の建物の外側に溝が巡る構造とも考えられるが、それでは他の建物の2倍近くの柱間を持った建物になる。方向も正東西に近い主軸方位を示すので、可能性は少ないと思われる。また柱穴と関係のない方形周溝遺構として考えて、その内方墳の事例と考えられなくないが可能性は少ない。その他祭壇としても無理がある。埋土中から古墳時代の遺物が出土する事からこの時代の何らかの遺構であるが、よく分からないのが現状である。

溝-20・25 (図7・24・31-5・7・9・12・17・19 表4-1・2)

4か所に寸断されて検出されたが、元は連続していた溝である。調査範囲内に両端が見られる。集落を区画する事を目的として作られた溝で、農業用水を流す溝ではない。南西側では溝24に1mまで近づいているが双方の溝は連続していない。断面は底の丸いU字状を示している。

溝-24 (図7・24・31-8・10・22・28 写真25・26 表4-1)

調査区西側の台状部上にあり、溝25の南側にあつて、L字状に曲がっている。溝の側面は垂直か或いはオーバーハングしている部分もある。

溝の堆積層は粘土層である事から滞水していた状態で、この溝も溝25と同様に区画溝であったと考えられる。溝幅は狭い。溝25と一体となって機能していたのであろう。掘立柱建物13は溝24が埋没した後に建てられている。

溝-27 (図7・25・31-1・4・6・13・15・25・27 写真28・29・32 表4-2)

西側開析谷にあり、調査区の南西側から流入して北東側に流れている断面V字の溝である。



写真28 溝-27 (北から)

少し蛇行しているが、比較的直線に近い。途中に隣の溝29と繋ぐ溝28も掘られている。溝から出土する遺物と掘立柱建物から出土している遺物の時期が一致している。溝の埋土中に砂層が層状に堆積している事から水が流れていたようで、灌漑用の水路として使用されていたらしい。この溝は南端の落込10、北端では溝30を切っている。

溝-29 (図7・25・31-2・18・23・24 写真30~32 表4-2)

この溝も西側開析谷にあり、溝27にはほぼ平行して流れる断面V字状の溝である。溝の堆積層中に砂層があり、溝27と同様の機能を担っていたらしい。溝27と溝29に挟まれた間が一定の間隔を示している事から道路とも考えられるが、溝が少し蛇行している事や別の溝が横切っている事、その上面に足跡が残る事もなく、人が歩いて硬化した状況や小石を敷いた箇所も無い事から、道として考えるには難しいようである。しかし道としての考え方も非常に面白く、興味ある見方と思っている。今後周辺の調査成果を総合して最終的な結論を出す必要があるのではないかと考えている。



写真29 溝-27 (北東から)

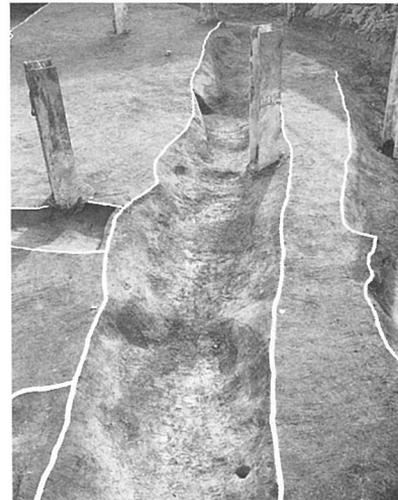


写真30 溝-29 (北東から)



写真31 溝-29 (北から)

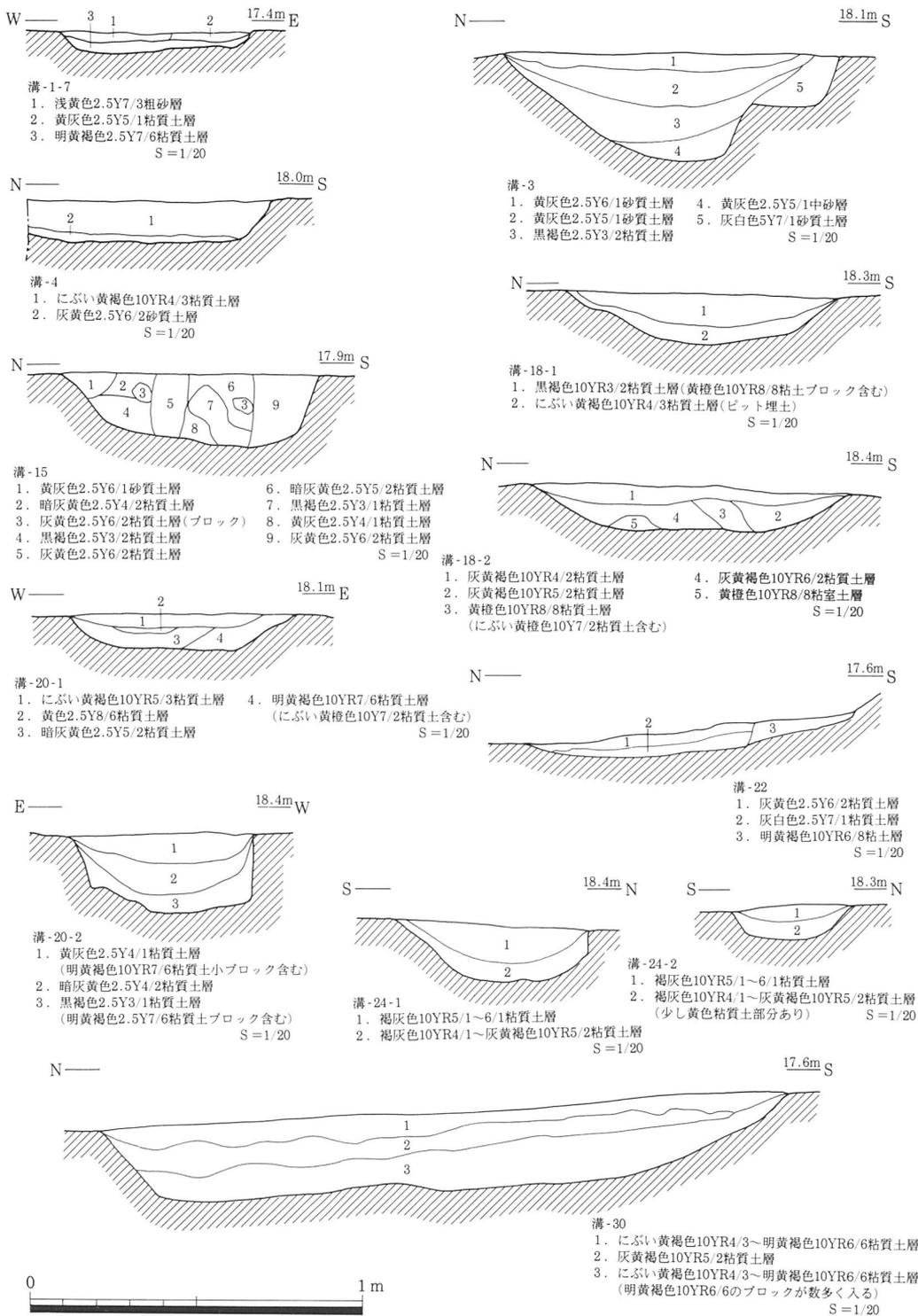
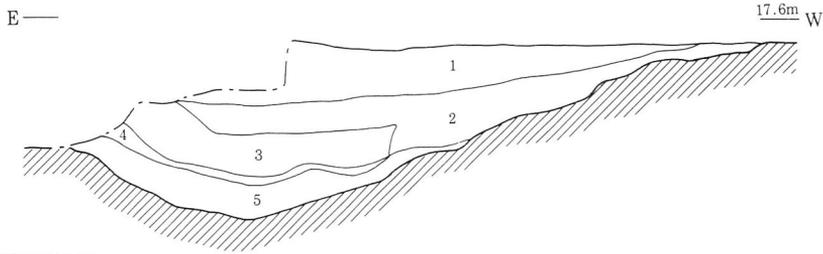
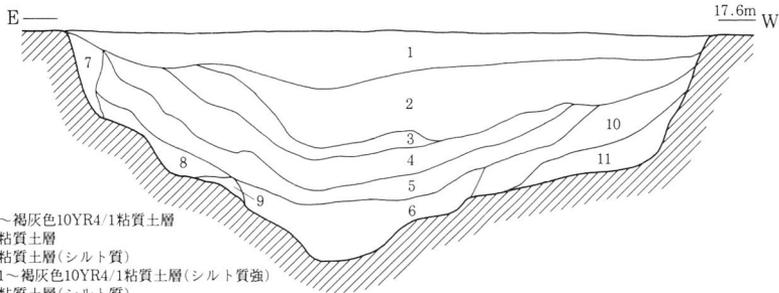


図24 溝断面図(1) 1:20



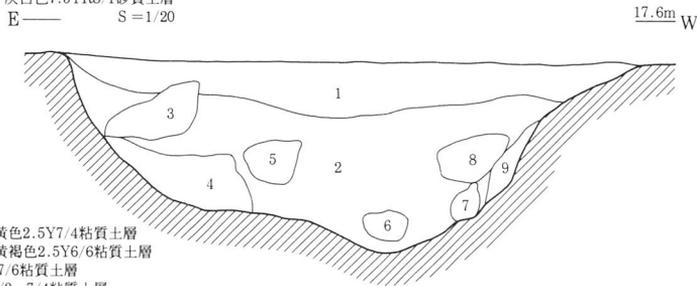
溝-27-1

1. 褐灰色10YR6/1粘質土層
 2. 褐灰色10YR5/1粘質土層(礫混)
 3. 褐灰色7.5YR5/1~6/1粘質土層(シルト質)
 4. 褐灰色7.5YR5/1粘砂質土層
 5. 黒褐色7.5YR3/1~褐灰色7.5YR4/1粘質土層(シルト質)
- S = 1/20



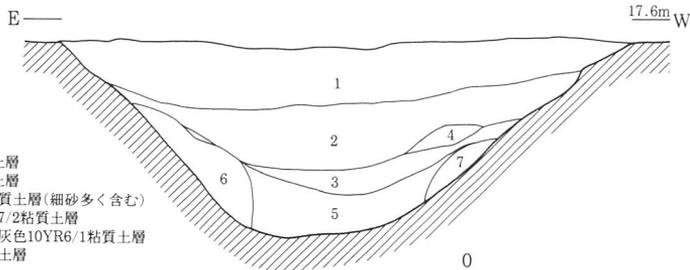
溝-27-2

1. 黒褐色10YR3/1~褐灰色10YR4/1粘質土層
 2. 黒褐色10YR3/1粘質土層
 3. 褐灰色10YR4/1粘質土層(シルト質)
 4. 黒褐色7.5YR3/1~褐灰色10YR4/1粘質土層(シルト質強)
 5. 褐灰色10YR5/1粘質土層(シルト質)
 6. 褐灰色10YR4/1粘質土層(シルト質強)
 7. 灰白色10YR7/1~明黄褐色10YR7/6粘質土層
 8. 灰白色10YR7/1粘質土層
 9. 明緑灰色10GY8/1粘質土層(シルト質)
 10. 褐灰色7.5YR5/1粘質土層(シルト質)
 11. 明褐灰色7.5YR7/1~灰白色7.5YR8/1砂質土層
- S = 1/20



溝-29-1

1. 灰白色2.5Y7/1~浅黄色2.5Y7/4粘質土層
 2. 黄灰色2.5Y5/1~明黄褐色2.5Y6/6粘質土層
 3. 明黄褐色10YR6/6~7/6粘質土層
 4. にぶい黄橙色10YR7/2~7/4粘質土層
 5. 黄灰色2.5Y6/2~明黄褐色2.5Y6/6粘質土層
 6. 黄灰色2.5Y5/1~明黄褐色2.5Y6/6粘質土層
 7. オリーブ褐色2.5Y4/3~黄褐色2.5Y5/4粘質土層
 8. 黄灰色2.5Y6/2~にぶい黄色2.5Y6/4粘質土層
 9. 明黄褐色10YR7/6~灰白色10YR8/1粘質土層
- S = 1/20



溝-29-2

1. 灰白色10YR7/1粘質土層
 2. 褐灰色10YR6/1粘質土層
 3. 明褐灰色7.5YR7/1粘質土層(細砂多く含む)
 4. 明褐灰色7.5YR7/1~7/2粘質土層
 5. 褐灰色7.5YR6/1~褐灰色10YR6/1粘質土層
 6. 明褐色7.5YR7/1粘質土層
 7. 灰白色7.5YR8/1細砂
- S = 1/20



図25 溝断面図(2) 1 : 20

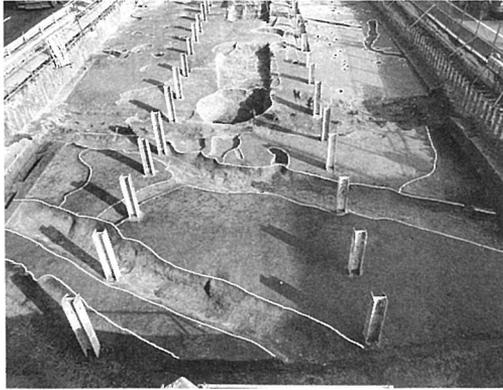


写真32 溝-27・29・31西側開析谷



写真33 開析谷・落込底面の足跡



写真34 落込断面 底面に足の踏み込み跡

溝-30・31 (図7・24・31-21・26 写真32表4-2)

西側開析谷にあり、溝27・29を繋ぐ浅い溝である。

落込-1 (図7・26・32-10 表5)

東側開析谷中央を南東から北西方向に流れる深く窪んだ流路跡と思われる。この周辺には深く窪んだ落込や土坑が数多くある。

集落が廃絶した後は湿地状となって、滞水した状態で植物が繁茂していたと考えられる。この間にIV層が堆積したのであろうか。中世まではこの状態が続いていたと考えられる。開析谷底面のVII層上面には偶蹄類の足跡が数多く検出されている。

開析谷の底面のかなりの範囲に広がっている。これは畜力を使用した農耕の痕跡なのか、或いは湿地に水を飲みに来た動物が残したものか分からない。この足跡の時期も、第IV遺構面に伴うものか、IV層堆積期間中のものかも分からない。

落込-8 (図7・26 写真35 表5)

調査区西北側にある。不整形な形状で、間に浅い部分があり、平面図では2つの遺構に分離したが、本来は一つのものである。遺構内から須恵器の壺と甕が融着した資料や土師器たこ壺などが出土している。

落込-10 (図7 表5)

西側開析谷にあり、溝27に切られている湿地状の窪みである。集落と同じ頃のものである。溝が掘られるまでは西側開析谷には自然の流れか或いは自然の流れに少し手を加えた程度の落込や自然流路が存在していた。これらが何らかの理由で埋没した後に溝27・29を開削して農業用水を通していた可能性がある。人工的な要素

の少ない落込や自然流路は落込10、溝30・31である。これらは自然の流路であった可能性もある。調査範囲が狭いので今一つはっきりしない。

落込-12 (図7・26 表5)

西側開析谷にあり、溝25と27の間にある。南側は井戸Bに削られて元の形状は分からない。これは土坑61まで続く大きな遺構であった可能性もある。そうすると大きな遺構なので堅穴住居も想定できるが、遺構の形状が不定型であるのと竈や柱痕などが検出できない事から堅穴住居の可能性は少ない。



写真35 落込-8 (北から)

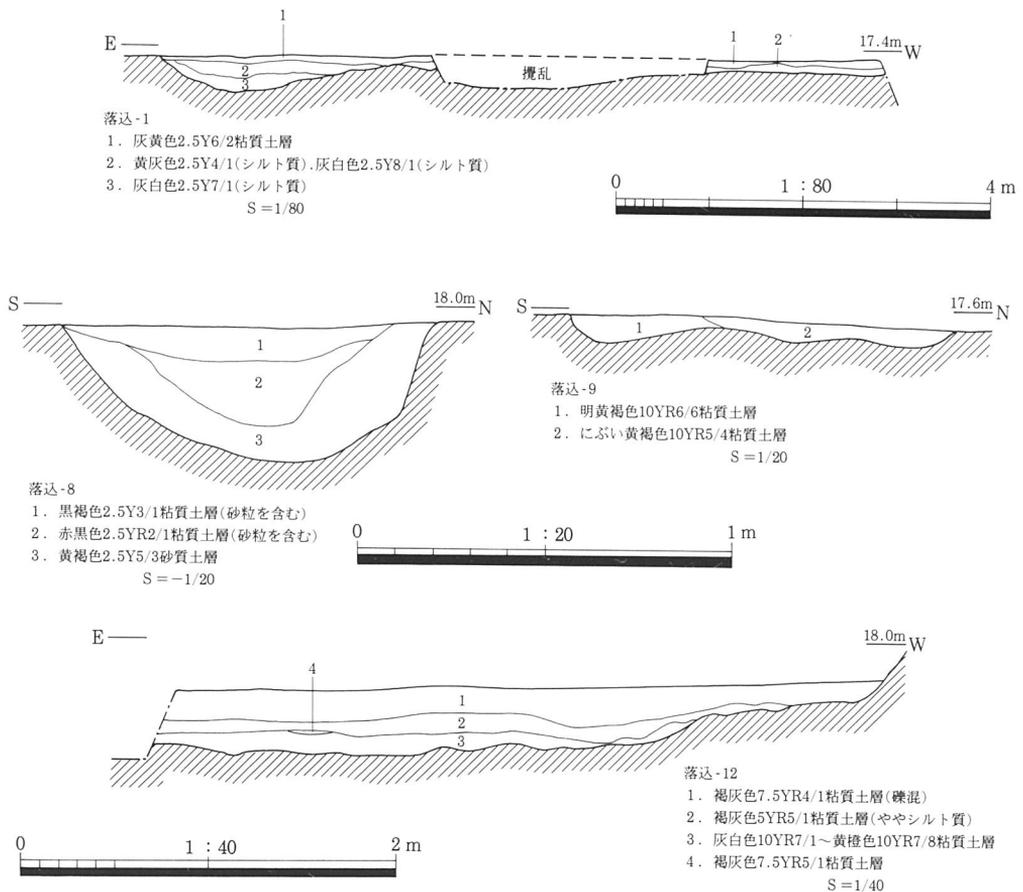


図26 落込断面図 1 : 20 1 : 40 1 : 80

土坑-1~16 (図7・27 表6-1) (土坑14・17を除く)

東側開析谷内の土坑で、周辺の落込と同様の性格で比較的小型の長径1~2mを測る浅い遺構が多い。開析谷底面の土坑7の埋土中から凹基式石鏃(図34-4)が1点出土している。古墳時代後期の遺構内から石鏃が出土したのは、原位置ではなく周辺に埋没していた石鏃が古墳時代後期の開発に伴って掘り出されて土坑内に埋没したと考えられる。この事は古墳時代後期の開発が相当量の土地を削り取り、掘り下げていたらしい事が窺える。台状部上面の土坑は開析谷内部の



写真36 土坑-59 (南西から)

土坑と違った性格を示しているようだ。

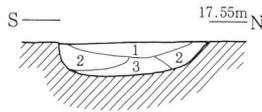
土坑-19~48 (土坑20・24・26・27・28・32・45は除く) (図7 表6-1・2)

台状部西側から西側開析谷への緩やかに下る斜面にある土坑は大きいものが多い。

土坑26・32・33・45以外の遺構からは遺物がほとんど出土せず、性格のいまひとつ分からないものが多い。

土坑-26 (図7 表6-2)

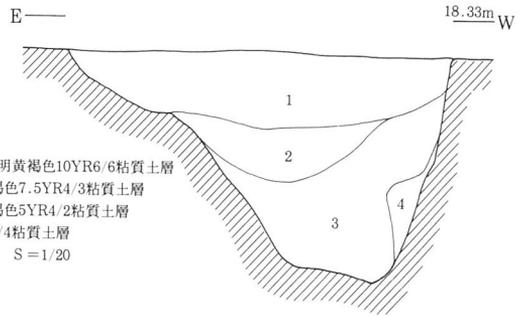
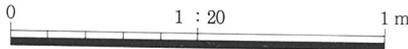
溝3と溝4に削られ本来の形は分からない。



土坑-7

1. 黄灰色2.5Y4/1粘質土層
2. 灰白色2.5Y7/1シルト質
3. 淡黄色2.5Y8/3シルト質

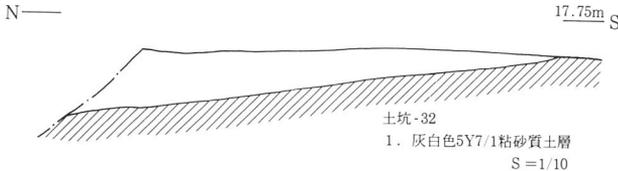
S=1/20



土坑-59

1. 灰黄褐色10YR6/2~明黄褐色10YR6/6粘質土層
2. 灰褐色7.5YR4/2~褐色7.5YR4/3粘質土層
3. 褐灰色5YR4/1~灰褐色5YR4/2粘質土層
4. にぶい黄橙色10YR7/4粘質土層

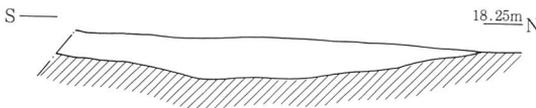
S=1/20



土坑-32

1. 灰白色5Y7/1粘砂質土層

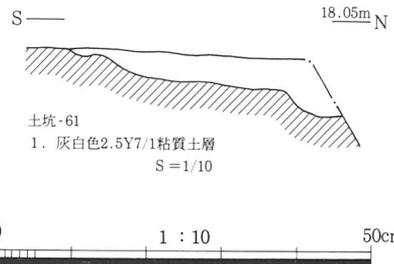
S=1/10



土坑-58

1. 灰黄色2.5Y6/2~灰白色2.5Y7/1粘質土層

S=1/10



土坑-61

1. 灰白色2.5Y7/1粘質土層

S=1/10

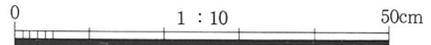


図27 土坑断面図 1:10 1:20

須恵器の杯蓋や土師器の破片が出土している。

土坑-32 (図7・27・34-3 表6-2)

細長い遺構で須恵器の甕、器台、土師器の高杯が出土している。

土坑-45 (図7 表6-2)

細長い遺構でピット-252の上部を削って重複している。須恵器、土師器の破片が出土している。

土坑-49~64 (土坑53・55~59は除く) (図7・27 表6-2)

深さのある遺構が多いが土坑58・61以外の遺構から遺物は出土していない。

土坑-58 (図7・27 表6-2)

細長い遺構でピット-312・313の上部を削って重複している。須恵器、土師器の破片が出土している。

土坑-59 (図7・27 写真36 表6-2)

不定形である事や灰黄褐色や明黄褐色系統の埋土が下層に入り込む傾向をみせて、地表面ではドーナツ状の灰色帯を作る事などから風倒木痕の可能性はある。しかし全体状で周囲を巡る形に調査できていないので断定できない。

ピット-199 (図7・33-8 表8-5)

台状部中央北側に位置して、堀3に接している。この遺構は柱穴にしては少し深くて大きい。建物を構成する一組の対になる柱穴もなく、単独の柱穴であるようだ。このような周囲の状況からもしかしたら便所であったとも考えられる。調査時に便所とは思いつかなかったので、埋土を採取していない。とても残念な事をしたと思っている。

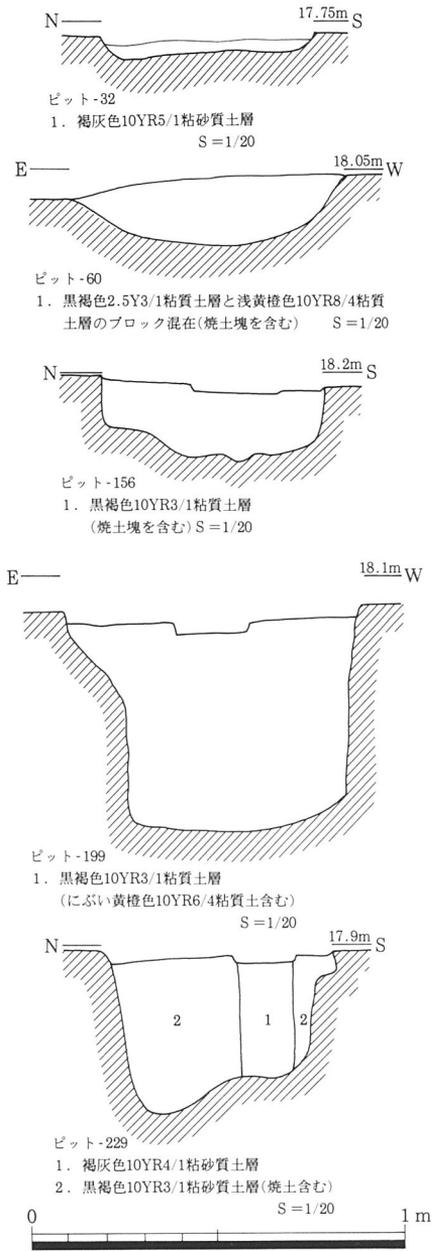


図28 ピット断面図 1:20

E) 奈良時代

奈良時代の遺構は非常に数少ない。開析谷の落込6や土坑14・53、溝4がこの時期に相当する。そして掘立柱建物13がこの時代末か次の平安時代の初頭に相当する頃である。奈良時代でも後半期の遺物がII層、III層から極少量出土している。墨書土器や須恵器杯身、杯蓋等がある。古墳時

代後期と比較するとはるかに少ない出土量である。この他に蓮華文の軒丸瓦が1点出土しており、縄目叩きの平瓦、丸瓦を伴っている事から近くに瓦を使用した建物が存在していた可能性がある。

掘立柱建物-13 (図29 写真37 表2)

集落の西端の少し西側開析谷に下り始めた所に位置している。調査できた規模は2間×2間であるが、まだ南側に伸びる可能性がある。主軸方位も南北方向と思われる。柱掘方は小さく、古墳時代後期の堀方の半分以下の直径30cm前後の円形である。柱の数が少ない割に柱間寸法が長いので建物規模は大きい。溝24が埋没した後に掘立柱建物13が建てられている。柱掘方からは奈良時代末から平安時代初頭頃の黒色土器が出土している。この建物は他の建物とは異なって奈良時代末期から平安時代初頭頃に建てられている。また柱掘方が小さくて他の建物と建物構造も異なっ

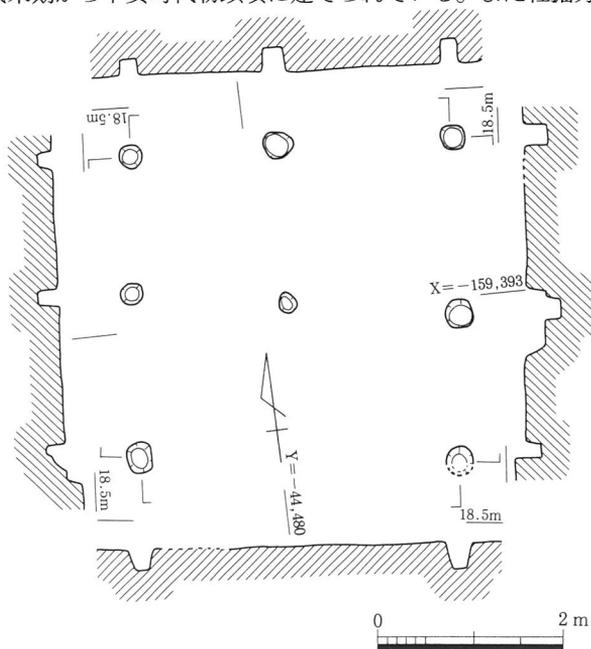


図29 掘立柱建物-13 1:80

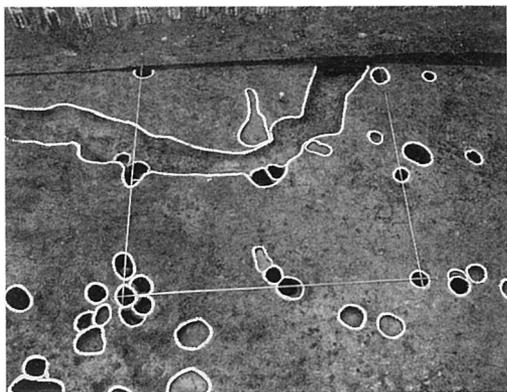


写真37 掘立柱建物-13 (北から)

ているようである。周辺にも同様の小さな柱穴が数多くあり、幾度か建物が建て替えられていたのではないかと考えられるが、掘立柱建物13以外には復元はできなかった。

溝-4 (図7・24・31-14・20 表4-1)

台状部上面の東南端に台状部縁に沿って南側から流れて来る。奈良時代や古墳時代の須恵器、墳時代の須恵器、土師器が出土している。

落込-6 (図7・32-2・5・6・8・9 表5)

開析谷底部にあり、台状部に沿っている。深さは浅く幅広い遺構である。奈良時代の須恵器の杯蓋とともに古墳時代の須恵器や土師器が出土している。

土坑-14 (図7 表6-1)

この遺構は開析谷内中央部に位置し、浅い遺構である。奈良時代の須恵器の杯身や弥生時代頃の遺物も出土している。

土坑-53 (図7 表6-2)

西側開析谷に下る途中の溝24の傍にある、小さな浅い遺構である。奈良時代の土師器が出土している。

ピット-175・176・261・262・279・302・305・316からは奈良時代の須恵器杯身、杯蓋、土師器杯、黒色土器碗などが出土している。ピット-175・176は柱掘方が大型で、他の奈良時代末から平安時代初頭頃の柱掘方と大きさが異なっている。この為、この2つの柱掘方は柱穴部分が腐食して窪んだ後に黒色土器が入ったのではないかと推測している。このため掘立柱建物3・8は古墳時代後期の建物と理解している。黒色土器は小さな破片であり、全体形状がわかるものは無く、詳しい時期を推定できない。おおよそ奈良時代末から平安時代初頭頃と推測している。

F) 平安時代

平安時代の遺構はほとんど見られず、先に述べた奈良時代末から平安時代初頭と推定される掘立柱建物13があるのみである。この他にこの時代と考えられる遺構はない。遺物では黒色土器碗の破片が建物13やその周辺の柱掘方から出土しているだけで、他には見る事がない。奈良時代末から平安時代初頭には掘立柱建物13とその周辺に数棟の建物群があって集落を形成していたと推測される。その規模は大きくないようである。この時代の遺物の出土量が少ない事や分布範囲が非常に狭くて限られている事からこのように推測される。

G) 鎌倉時代

この時代に該当する遺構が全く見られないし遺物も出土していない。

H) 室町時代

この時期には開析谷内の溜池堆積層であるⅣ層から、高台が低くなって三角形に少し退化し始めた瓦器碗が出土している。この他巴文の軒丸瓦や離れ砂を用いた平瓦、丸瓦が100点ばかり台状部東側落ち際の落込7Aや溝22を中心に出土している。近くに瓦を使用した建物が建てられていたようだ。奈良時代の蓮華文軒丸瓦とこの中世の瓦がどの様に関連しているのか、あるいは全く関係ないのかは現状では分からない。

開析谷内にこの時期まで地表面として堆積し続けたのはⅣ層であるが、この層の上面から畦畔や水田らしい区画は全く検出できていない。この時期に南側の長曽根遺跡では中世の遺構の溝や集落が調査されているにも係わらず、開発が最も先行するはずの開析谷にこの時期の水田が明らかにできていない事はおかしな事と考えられる。東側開析谷のⅣ層の上層に更池築造時までの水田が営まれていたが、更池築造時に底を掘り下げた為に削られて分からなくなったのではないかと考えられる。

溝-22 (図7・24 表4-1)

東側開析谷の台状部に沿って掘られている。東側開析谷が少し埋没した後に台状部に沿って、溝が掘られていたらしい。出土した遺物は中世では瓦器碗などが出土している。古墳時代では須恵器が出土している。更池築造まで溝22などが水路として機能しており、開析谷東側にはⅣ層が